
スーパーロボット大戦OG ナイトオブガーディアン

混沌の魔法使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG ナイトオブガーディアン

【Nコード】

N49130

【作者名】

混沌の魔法使い

【あらすじ】

夜天の守護者の主人公、八神龍也がスカリエッティ作のPTでOG世界に介入する！！この作品は夜天の守護者とOGのクロスになります

基本一作目の夜天の守護者が未完結なので、投稿間隔は空くと思いますがどうかよろしくお願い致します

オリジナル機体紹介

どうも混沌の魔法使いです！！ここはナイトオブガーディアンに登場する、オリジナルの機体の解説コーナーです！！

スパロボ風の解説にしたつもりですが・・違う所がありましたらご指摘ください、またここは新しく機体が登場する度に更新しますのでどうかよろしく御願い致します、それでは機体解説始まります

ヴァルグレイン

ジェイルスカリエツテイ作のパーソナルルーパーの一号機、龍也の全ての戦況に柔軟に反応できる所を再現している為、近、中、遠に射撃、格闘戦の全てに高い能力を誇る、飛行形態への変形機構を持つ、武装は全てジェイルが気に入った機体の物が装備されている為、アルトアイゼンやゲシュペンストと同じ物を装備している、また合体機能を持つが、二号機、三号機が今だ未完成の為、現在封印状態にある

全長	20、8 m
重量	53、4 t
HP	5500
EN	240

運動性	165
-----	-----

装甲値	1500
-----	------

サイズ	M
-----	---

地形	空S 陸S 海S 宇S
----	-------------

特殊能力	
------	--

EN回復中 毎ターンENが最大値の20%分回復します
バリヤ（プロテクション） 気力110以上で発動、1800以下のダメージを無効にします
分身 気力130以上で発動、50%の確率で敵の攻撃を回避します
聖王の魔力 気力140以上で発動、装甲値、運動性強化、武装追加の効果あり
変形 機体を別形態に変化させる事が出来ます
合体 複数の機体を合体させて、別形態の機体に変化させる事が出来ます

武装

頭部バルカン
右腕 プラズマステーク
左腕 リボルビングバンカー
ブースデッドライフル
ビームソード
肩部複装型ミサイルポット
ガイズトブレード 魔力によって実体化する剣 イメージはスレイドゲルミルの斬艦刀
超大型ビームライフル アーベントのパルチザンランチャー
ガンスマッシャー
ジョーカー アルトアイゼンの切り札の別バージョン

フライヤーモード
ビームキャノン
ミサイルポット
フルバースト

超高射程ビームキャノン
ガンスマッシュシャー×2

どうも混沌の魔法使いです！！ここはナイトオブガーディアンに登場する、オリジナルの機体の解説コーナーです！！

スパロボ風の解説にしたつもりですが・・違う所がありましたらご指摘ください、またここは新しく機体が登場する度に更新しますのでどうかよろしく御願い致します、それでは機体解説始まります

アイゼンヴォルフ

全長	18、8 m
重量	50、4 t
HP	4800
EN	270

動力 レリック魔法力

ジェイル作のPTでヴァイスリッター似ている青を基調としたカラーリングの機体加速力及び機動性と遠距離射撃性を重視した機体元々は、あらゆる状況においても問題なく対応できる汎用機として開発された。だがジェイルの遊び心で射撃戦と運動性に特化した、カスタムにした為、装甲が脆弱という欠点を持つが、PTの中では最高の機動性を誇る、元々はヴァルグレインの二号機の予定だったが、はやての却下を受けた為、ヴァルグレインとの合体能力を排除された、ある意味悲しい機体である。

運動性 195
装甲値 1100
サイズ M
地形 空S 陸S 海S 宇S

特殊能力

EN回復中 毎ターンENが最大値の20%分回復します
分身 気力130以上で発動、50%の確率で敵の攻撃を回避します
分離 背中のバックパックを分離し機動性を強化します
ハイパージャマー 50%の確率で敵の攻撃を回避します

武装

マシンキャノン

腕部装甲に内蔵された実弾兵器。

3連ミサイルランチャー

両肩に3基ずつ設置されたミサイルランチャー。

インパルスキャノン

背部のブースターを砲身として発射するキャノン砲。

ブレードビット

ビームの刃がついた大量のビット兵器。R-3のストライクシールドやアシュセイヴァーのソードブレイカーのように敵に衝突し、切り刻んで攻撃をかける。

デイストラクションライフル

メイン武器となる弾丸を打ち分けられる汎用性の高い大型高出力のライフル

Bモードでは上段から貫通力のある特殊徹甲弾を、Eモードでは下段からジェネレーター直結のエネルギービームを発射し、Nモード突撃しながら実弾を3連射する。射程は長いが近距離では使用できない

Wモード

大出力ビームを2発撃つ。射程の長さが半端なうえ隣接しての使用ができないが、威力は高い。状況に応じて撃ち分けが可能。

ショートランチャー

腰に装着された2挺のビームライフル。ビームを片方2連射、計4連射する。

デイストラクションライフルMAXモード

デイストラクションライフルを機体のジェネレーターに接続、砲身を展開して発射する。

ルインシュヴァリアー

ジェイル作の準特機型のPT、モデルはグルンガスト、スレードゲルミル等の近接に特化した機体、カラーリングは黒を基調にしており見た目のインパクトがかなり強い、ルインII破壊を冠する機体でその名に負けない破壊力を有する、ヴァルグレインシリーズの機体で四号機に当たるが、ヴァルグレイン、二号機、三号機との合体機

構は無いが変形にし巨大な剣となり装備される。搭乗者はヴィータ

全長	29、8 m
重量	60、4 t
HP	6000
EN	3000

運動性 140

装甲値 1700

サイズ M

地形 空S 陸S 海S 宇S

特殊能力

EN回復中 毎ターンENが最大値の20%分回復します
バリヤ（プロテクション） 気力110以上で発動、1800以下のダメージを無効にします
パッシブビット ビーム攻撃のダメージを1000軽減。消費EN5。

聖王の魔力 気力140以上で発動、装甲値、運動性強化、武装追加の効果あり

オルゴン・クラウド 動力炉にして転移装置、そしてバリアフィールド発生装置。

無条件で、全属性のダメージを1200軽減するバリアが発生。気力が130以上になると、更に分身と移動コスト無視効果が追加
変形 別形態に変化します

武装

バリア展開用パッシブビット 機体のいたところに装備された
防御用ビット。射出して機体前方でフォーメーションを組み、バリ

アを展開する。その効果は高

エッジブラスター 両肩のユニットからビームを発射する。最も射程が長いが、半端に長く使い勝手はあまり良くない。

スパイラルナックル 腕を回転させて射出する。いわゆるロケットパンチ。

ダブル・スパイラルナックル 両手を組み、そのまま回転させて打ち出す。

ギガブラスター 胸部装甲を開放して放たれる高出力砲。頭部を変^{フェイス}形して排熱して胸部装甲を展開。すさまじいエネルギーを発射する。射程が長く威力も高い。

オルゴンソード

ソードライフルからオルゴン結晶の刀身を展開ジャンプから斬りつけ、なぎ払いで吹き飛ばした後追撃、突き刺して締める。

オルゴンライフル ソードライフルからビーム弾を3連射また大出力ビームを撃ったのち反対側に跳躍、もう一度ビームを撃って挟み撃ちにする。

オルゴンソードファイナルモード ソードライフルの銃身を両側に展開し、オルゴン結晶の巨大な刀身を形成。参式斬艦刀に似たモーションで斬りつけ、上空に斬り飛ばしたあと追撃。落下する敵を大上段から一刀両断し、大爆発のエフェクトで締める

ゴルトフリーゲル

その名の意味は『黄金の翼』。

金色と黒色に輝く分厚い装甲で全身を鎧い、その身の丈以上もある砲・剣・槍・盾を合わせ持つ特殊兵装、全領域対応型格射両用試作型兵器『レーヴァテイン』で武装する、ヴァルグレインの二号機当たるが、ぱっと見では二号機と判らないが、良く見ればヴァルグレインとの共通パーツが幾つか見られる（なおこの『レーヴァテイン』は試作型のため槍としての機能だけがまだ付与されていない）背部に装備された大型特殊ブースターは35mもある機体を軽々と空中へ飛ばすほどの出力を持つが、現在はクラナガンからOG世界に転移する際に失敗した為、機体やメインシステムは破損している為、半分程度の出力しか出し切れず空中での行動が制限されている、だがその性能は特機に迫るほど高いポテンシャルを秘めている、搭乗者はシグナム

HP…5600

EN…200

運動性…100

装甲…1600

サイズ…L

移動力…6（陸）

地形適応…空B陸A海B宇A

特殊能力

合体

EN回復中

バリヤ（プロテクション）

気力110以上で発動、1800以下

のダメージを無効にします

切り払い

フルーフクーゲル…訳せば『呪いの弾丸』・・・特に意味はない。

こめかみの固定武装で、早い話がバルカン砲。ただし準特機サイズ。ストライク・ブーストナックル・グルンガスト・シリーズの標準武装であるブーストナックルを参考にしたもので、ナックル射出時の加速を高めさらに装甲の形状を変化させてやることで貫通力を上げている。

レーヴァテイン／フランメシユバールト。全領域対応型格射両用兵器『レーヴァテイン』に標準装備されている超高熱の刀剣。訳すと『焰の剣』

レーヴァテイン／アイゼンシュラク・全領域対応型格射両用兵器『レーヴァンテイン』に標準装備されている大型ガトリングキャノン。訳すると『鉄の一撃』

レーヴァテイン／ギドラ・カノーネ・全領域対応型格射両用兵器『レーヴァンテイン』に標準装備されている中口径ビーム・ランチャー。訳すると『準竜砲』

ゴルト・テンペスト・両肩の射出口から竜巻状に射出する。使い手の意思次第で思うがままに操作する

ことが可能であり、敵機のシステム内に侵入し外と内側から攻撃する（装甲に取り付けば装甲を侵食し、そこからシステムを改竄・デリートしていく。ただし攻勢型のナノマシンではないため持続性は低い）。ちなみに肩の機構はダイゼンガーっぽい。

ドラッヘ・カノーネ・竜撃砲。背部の大型特殊ブースターを前方に展開し、大口径砲として使用する。放たれた金色の閃光が敵機を撃滅する。

ヴァルトフェニシオン

ジェイル作のPT、モデルはグランゾン、ネオグランゾン、ヴァルシオン等の究極とも言われる特機をベースにPTにスケールダウンした物で、背中に3枚6対の漆黒の翼を持ち、機体の装甲やカラーリングははやてのバリアジャケットと同じ物である、グランゾンがベースの為湾曲フィールドを装備している上にイナーシャルキャンセラーを装備している為、鉄壁の防御を誇る、基本武装は翼から放つビームキャノンと、ガンファミリヤ等の射撃武器と高範囲に及ぶMAP兵器を搭載し、ビームサーベルによる近接戦も出来るが、基本的に射撃とMAPが武器なので格闘戦の頻度は低い、一号機のヴァルグレイン、二号機のゴルトフリーデル、三号機であるヴァルトフェニシオンの3機で合体し、SRXの様な特機型のスーパーロボットになる

全長	19.8 m
重量	50.4 t
HP	4800
EN	300
運動性	155
装甲	1300
サイズ	M
地形	オールS

特殊能力

EN回復中、

イナーシャルキャンセラー（気力130以上で発動するバリア2500までを無効 EN消費5）
ラプラスの魔（気力140以上で発動、1ターンに一度ひらめき、攻撃時に必中）
湾曲フィールド ダメージー10%
分身 50%の確率で攻撃を回避する

武装

タナトス （翼の先端から収束ビームを一斉照射）
ニュクス（タナトスをのビームを剣にする）
ガン・ファミリア
アトラクターシャワー（MAP）自分を中心に広がる魔力波で攻撃する、敵味方の識別判定がある
インフニティブラスター
ギガグラビトンキャノン
ギガグラビトンウェーブ（MAP）放射線状に広がる魔力波、敵味方の識別をしない
アキシオンクラスター
ラグナロク（サイバスターのコスモノヴァ）

2機を追加しました！！ヴァルグレインと合体する機体のアイデアは全部揃いました！なのでここで合体する機体の募集は終わりですが合体後の機体とフェイトの機体の募集はまだしています！なのでどうか協力してくれると嬉しいです、更新の時にまたお会い致しましょう

第1話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回は新連載です！！前の先行版だったOGとのクロス、スーパードット大戦OG ナイトオブガーディアン
の正式投稿です！！、ですがあくまでメインは夜天の守護者なので投稿の間隔は空くと思いますが宜しくお願いします！！また始めて見る方も居ると思いますが、この作品は私の第一作目の、夜天の守護者の続編になります、ですので見たことない方が居ましたら、夜天の守護者も宜しくお願いします！！それではスーパードット大戦OG ナイトオブガーディアン始まります

第1話

第一話

「んっ?・・・これは・・・良い!!良いぞ!!最高だ!!」

私は平行世界の1つに目を奪われた、それは巨大なロボット同士が戦う世界だ

「良いぞ!!良いぞ!!これだ!!私が作りたい物は!!」

最近発明意欲が沸かなくてブラブラしていたが・・・私の心は決まった・・・この世界に送れるメカを作り出そうと・・・

「ふっふっふ・・・龍也もきつと気に入るはずだ・・・何故なら男は皆ロボットが好きだからな!!」

私は握り拳を作りながら地下研究施設に向かった・・・

「最近ジェイルを見ないがどうしたんだ?」

最近ジェイルの姿を見ない事をはやてに尋ねると

「んーなんか地下研究施設で何か作ってる、見たいやで?気になるなら見てきたら?」

そういうはやてに頷き地下研究施設に向かう・・・そこで私が見た物

は・・

「何なんだ・・これは・・」

蒼銀に輝く装甲を持った人型のロボットが合った・・私がそれに驚いていると

「ん？龍也！！龍也じゃないか！！丁度良い今呼びに行こうと思っ
てたんだ！！」

ジェイルが笑いながら近付いてくる、私はロボットを指差しながら

「このロボットは何だ？」

ジェイルは首を振りながら・・

「ロボットなんて名前で言わないでくれ、これはヴァルグレインだ
！」

ヴァルグレインを見上げる

「良いな・・実に格好良い・・」

私もロボットは好きなので、良いと言うと

「龍也！！ヴァルグレインは既に完成している！！そこで龍也に頼
みたい事がある！！」

頼みたい事？何だろうかと思いながら尋ねると

「私が開発した平行世界に行く機械で別世界に行って、ヴァルグレインの性能を試して欲しいんだ!!」

性能テストか・・・ヴァルグレインを見ながら

「良いぞ、引き受けよう!」

テストを引き受けるというとジェイルは笑いながら冊子を取り出し

「これがヴァルグレインのスペック表だ!! それを見ておいてくれ、平行世界に行くのは今から3日後だからな!」

私はそれを受け取り自室に戻った・・・それから3日後・・・

「良いか? 龍也・・・一応武装は搭載してある・・・ヴァルグレインの武装で破壊した機体は自動的に脱出装置が作動し、パイロットは無事だ・・・逆に撃墜されないように気をつけろ・・・向こうの世界では何があるか判らんからな?」

ジェイルの説明に頷き、私はヴァルグレインに乗り込んだ・・・それと同時に私とヴァルグレインはミッドから消えた

秋葉原で2人の男女の姿がある、1人はおもちゃ屋の前から動こうとせず、それを女性が嗜めていた・・・

「リュウセイ君、そろそろ行こうよ」

青い髪の少女・・・クスハがそう言う

「も、もうちょつとだけ！」

リュウセイと呼ばれた青年はもう少しだけと言う

「そう言って、さっきから30分ぐらい経ってるんだけど」

時計を見ながらいうクスハにリュウセイは

「だってさこの限定版の超合金、もう手に入らないんだぜ？」

おもちゃ屋の前に広告を指差しながら言うと、クスハは

「早くしないと病院の面会時間・終わっちゃうよ？」

どうやら2人は病院に用があるようだ・だがリュウセイは

「だから、もう少しだけって言ってんじゃん」

ロボットの広告を指差し動こうとしない・そこでクスハは

「リュウセイ君のお母さん、待ってると思う」

どうやらリュウセイの母は病院で入院してるらしく・その事を出されたリュウセイは

「わかったよ、クスハ」

名残惜しそうにその場を後にした・

あーあ・・・惜しかったな・・・もう少しで限定版の超合金が手に入つたのにな・・・そんな事を考えながら歩いていると

「リュウセイ君って、ホントにロボットが好きなのね」

クスハがロボットが好きなのねと笑いかけてくるので俺は

「ああ。何てったって、ロボット特にスーパーロボットは男のロマンだからな」

笑いながら言うと

「スーパーロボットって、こないだ新聞に載ってた軍のパーソナル何とかっていう」

パーソナルトルーパーの事を言うクスハに

「違う違う。パーソナルトルーパーはリアル系、スーパー系のロボットってのはな、見た目のインパクトがドーンとあって変形とか、合体とかをバリバリやって、ものすげえ必殺技も持ってる」

熱くスーパーロボットの話をしていると

「でも、結局はロボットなんですよ？」

良く判らないと言いたげなクスハに

「あ、あのなあ。やっぱ、女にゃわかんねえか。男のロマンってのは」

俺がそう呟くと

「うふふ」

クスハが笑うので

「な、何だよ？」

驚きながら言う

「ロボットの話をしてるリュウセイ君って、子供みたい。それに、すっごく嬉しそう」

そう笑うクスハに

「そうかい？ ま、俺の夢は本物のロボットに乗ることだからな」

夢は本物のロボットに乗る事だと言う

「だから、あのゲーム『バーニングPT』をやってるんだ？」

ゲームの事を言うクスハに

「ああ。あれは操作方法とかグラフィックがリアルだし、それに」

バーニングPTの事を話そうとすると

「その話は後でゆっくり聞いてあげるから、早く病院へ行きましょ」

強引にその話を打ち切るクスハに頷き、俺は病院に向かった・

「いらっしゃい、リュウ、クスハちゃん」

ベッドに腰掛け言うおふくろにクスハは

「こんにちわ、ユキコおばさま」

笑いながら挨拶をし

「おふくろ・・具合、どう？」

俺が体の事を尋ねると

「ここところは気分もいいし・・大丈夫よ」

笑うおふくろに

「ちゃんとメシ、食ってる？ 食べないと元気出ないぜ」

ちゃんとメシ食ってるか？と尋ねると

「うふふ・・これじゃ、どっちが母親かわからないわね、それより、リュウ。勉強の方はちゃんとやってる？ 個性重視の入試とは言っても、基礎学力は必要なんだから・・」

笑いながら頷き、俺の大学の話をするおふくろに

「おふくろ、俺さ・・大学へ行くのやめようと思ってるんだ」

前から考えていた事を言う

「え・・・？」

困惑するおふくろに

「ほら、おふくろの入院費も稼がなきゃならないし・・・俺、大学行かずに働くよ」

大学にいかず働くと言うと

「ありがとう、リュウ。でもね・・・お母さんは反対よ」

反対というおふくろに

「だけど」

反論しようとする

「あなたの人生はこれからなのよ、リュウ、だから、今を焦らないで。あなたにしか出来ないことが必ずあるはず」

諭すように言うおふくろに

（俺にしか出来ないこと、か）

お袋に言われた事を考えていると

「だから、自分の人生は自分で決めなさい。死んだお父さんだってきつとそう言うと思うわ」

笑いながら言うおふくろに

「わかったよ、おふくろ」

考えてみると言いながら頷くと

「ユキコ・ダテさん、検査の時間です」

看護婦が来て検査の時間と言われると、おふくろは

「リュウ、この後の予定があるんでしょ？ 早く行かないと時間に遅れるわよ」

笑いながら言うおふくろに頷き、俺はクスハと一緒に病院を後にした・・

「リュウセイ選手、ゲームスタートわずか15秒で相手を撃破！！全日本バーニングPT選手権大会の優勝者はリュウセイ・ダテ選手に決定しました！！」

アナウンサーの言葉にガッツポーズを取りながら

「おっしゃあ！！」

喜んでいると

「リュウセイ君、おめでとう！」

クスハがおめでとうと言ってくる、俺は笑顔で返事を返した

「リュウセイ君、優勝した感想は？」

アナウンサーのインタビューに

「テンザン・ナカジマと対戦できなかったのが残念だけど、優勝は優勝だ！気分は最高だぜ！」

テンザンと戦えなかった事を残念だと言うと

「そう言えば、テンザン君はこの決勝大会を棄権していますねえ、ですが優勝は優勝です！では、リュウセイ君に優勝トロフィーと賞金の授与を！」

トロフィーを持ってくるアナウンサーの姿を見ていると

「ん？ 何だ？ 外が騒がしいな・・・」

妙に外が騒がしいと感じた瞬間

ズドン！！

「うあああっ！！！」

ドームが大きく揺れた・・・俺はそれと同時に意識を失った・・・

「う、うう・・・何だっただ、一体・・・？ク、クスハ・・・大丈夫か・・・？」

意識を取り戻し、近くに居たクスハの無事を尋ねると

「う、うん」

頷くクスハに一安心していると

「!! な・・! ? 虫型のロボット・・?」

俺の視界に虫型のロボットが3機飛び込んでくる

「な、何なの、あれ・・! ?」

困惑するクスハを横目に

「あ、あいつ・・軍のパーソナルトルーパーや戦闘機なんかじゃねえ・・こっちを見てやがる・・! ヤバイ、このままじゃ・・!」

虫型のメカと目が合った瞬間

ピキン!!

「な、何だ、今の! ? 目の前で火花が?」

目の前に火花が散った感覚を感じ外を見ると

「! あれは連邦軍のパーソナルトルーパー、量産型のゲシュペンストMk-III! な、何で、こんな所に? しかも一機だけ」

灰色の機体の姿に驚いていると、戦闘機が離脱していく

「お、おい! な、何で軍の戦闘機が逃げていくんだよ! ? あの

虫ロボットはどうすんだ！？このままじゃ、やられちゃうじゃねえか！！」

軍が逃げて行った事に混乱していると

「リュ、リュウセイ君・・・！」

倒れているクスハの姿に俺は決心した

「いいか、クスハ。お前はここから逃げろ！」

逃げろと言うと

「え！？ リュウセイ君は！？」

俺の事を尋ねるクスハに

「いいから、逃げろ！ 俺がその時間を稼いでやる！！」

俺はゲシュペンストの方に走り出した

「な、何をする気なの！？ 待って、リュウセイ君！リュウセイ君！！」

クスハの呼び声を見殺し俺はゲシュペンストに乗り込んだ

「ん！？ コックピットハッチが開いてる。しかも、中に誰も乗ってねえ！こ、これは！？お、同じだバーニングPTのコックピットの中と・・・な、何で軍の最新兵器のコックピットがゲームと同じになっただんだ！？」

ゲームと同じコックピットに困惑していると

「か、囲まれた!？」

3機のメギロートが俺を囲みビームを撃って来る

「うああっ!!！」

ゲシュペンストが大きく揺れる、その瞬間また火花が散る感覚を感じた

「く、くそっやってやる! 操作がバーニングPTと同じなら、やってやる!! これ以上、街や人を攻撃されてたまるかっ!! こ、こいつが姿勢制御用パネル・・火器管制はこれ・・BMセクターも同じだ! よ、ようし行くぞ、ゲシュペンストMK-II!!！」

俺は操縦桿を握りながら

「こ、このまま距離を詰めて戦えば、バーニングPTの要領で」

接近戦に持ち込もうとしていると

「あなた、何をやってるの!？」 相手は中距離戦闘タイプの機動兵器なのよ!」

コックピットに女の声が聞こえそれに驚き動きが硬直する

「今すぐ戦闘モードをミドルレンジに切り換えなさい!」

命令口調の声に

「あんた、誰だ!？」

困惑しながら尋ねると

「いいから、戦闘モードを切り換えて!素人のあなたじゃ接近戦なんて無理よ!！」

無理だという女の声に

「そんなの、やってみなきゃわからねえだろうが!！」

俺は怒鳴りながらビームライフルを構え、虫型の機械を狙い

「それより、ごちゃごちゃ言ってる暇があったら手ェ貸すか、応援を呼んでくれてんだ!!!あんたら軍人だろ!?!街や人を守るのが仕事だろ!?!違うのかよ!!!」

怒鳴りながらビームライフルのトリガーを引いた・・・女の声が何かを言っていたが俺の耳にその声が届く事はなかった・・・

「き、機体のバランスが!ち、違うゲームとは全然違う!!!」

操作に困惑しながらライフルを放つ・・・その反動で

「ぐ、ぐうつ!こんなにGがキツイなんて!ゲームなんかじゃねえこ、これが本物の戦闘って奴か!だから!絶対に負けられねえんだ!!!」

Gに苦しみながら俺はライフルの引き金を引いたが虫型のメカには当たらない・

「くそ・・落ち着け・・ここは街中だ・・街中の戦い方は・・こうだっ!!」

ビルの陰に隠れライフルで狙撃する

「ピピッ・・」

ドーン!!

旋回していたメカを1機打ち抜く

「こうだ・・この要領で・・」

ビルの陰からもう1機打ち落とすが・

「ちくしょう!!もう学習しやがった!!・・ライフルの射程に入って来ない!!」

最後の1機が射程に入らず、口からビームを撃って来る

「くっ!!」

ゲシュペンストを横っ飛びさせビームを回避し、武装を確認する

「T-LINK・・リッパ?・・これだ!!行け!!」

背中のコンテナから三つの刃を持った機械が飛び出し

「ピッ・・・」

ドガン

虫型メカを両断した

「はぁ・・・はぁ・・・何とかなったか・・・」

メカを全て撃墜した事で一安心し、モニターから目を外した瞬間

ビーッ！！

ロックオンの音が響く・・・それにモニターを見ると

「ピッ・・・」

上空から突撃して来る虫の機械が見えた

「避けれない・・・くそ！」

来るべき衝撃に備えた瞬間

ズドン！！

上空からミサイルが飛んできた撃破する・・・それに応援が来たのか？
？と思い空を見上げると

「・・・」

蒼い戦闘機が俺の上に居た・・・見た事のないデザインに困惑しているとその戦闘機は何処かに飛び去った・・・

「何だったんだ・・・あれは・・・？」

その戦闘機に困惑していたのはリュウセイだけではなかった・・・リュウセイの事をモニターしていた2人の軍人もその戦闘機の正体を考えていた・・・

「クスハ！ どこに行っただんだ！？」

ゲシュペンストから降り、クスハを探していると

「お前がリュウセイ・ダテだな？」

青い髪が目付きの鋭い男が尋ねて来る・・・

「あ、あんたは？」

俺の名前を知っている男に動揺しながら尋ねると

「俺の名はイングラム・プリスケン。見てのとおり、軍人だ」

軍服を見せながら言うイングラムに

「そんなことより、クスハを捜さなきゃ！」

クスハを探しに行こうとすると

「クスハ。お前と一緒にいた少女の名前か？」

クスハの事を知っている男に

「! あ、あんた・・・あいつがどこにいいのか知ってるのか! ?」

クスハの事を尋ねると

「ああ。彼女は救急隊に救助され、無事だ」

無事だという男の言葉に・・・

「そ、そうか・・・なら、良かった」

一安心していると

「それよりも・・・」

イングラムが俺の顔を見ながら何かを言おうとするので

「俺に何か用があるのかよ?」

用があるのか? と尋ねると

「ああ。俺と一緒に来てもらおうか、リュウセイ・ダテ」

その日から・・・俺の人生は今までと全く違う道を歩き出した・・・

第2話に続く

第1話（後書き）

どうでしたか？OGのGBA版をやりながらの執筆なので台詞は完璧だと思うんですが・・違う所があったなら指摘が欲しいです
龍也は少しだけの参戦でした・・次は南極の惨劇まで飛びます・・
そこで完璧に龍也の機体が登場しますのでお楽しみに・・まあ第2話は夜天の守護者完結後にするつもりですが・・人気があれば新規で執筆を開始したいと思います、元があるのでそれを見ながらオリジナルの話を組み込むので、執筆は楽です（一話2時間前後です・・理由はGBAをやりながらなので・・）ですがメカでの戦闘描写が難しいのでアドバイスを欲しいです・・ですのでアドバイスをお待ちしています！！また機体名と後3機のメカのアイデアを募集しています、2機は射撃形と一点特化破壊型の機体と、もう1体は合体後の機体です・・私では1機が限界だったので・・アイデアを貰えると嬉しいです！！それでは失礼致します

第2話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！

O Gクロス第2話の更新です、機体のアイデア募集中なのでどうかよろしくお願い致します、それでは本編始まります

第2話

第2話

俺が連邦の軍人になってから2日たった・・・その間に訓練で怒鳴られたり、未確認との戦闘があったりしたが・・・今のところ無事に切り抜けられている・・・だが今はそれより気になる事があり、アヤに尋ねてみる事にした・・・アヤは俺が始めて戦闘した時に怒鳴ってきた軍人だが・・・話してみると意外と優しい人物だった

「おふくろやクスハと連絡が取れないんだ・・・メールが届いてねえのかなあ」

何度メールしても連絡が無い事を不審に思い尋ねていると

「お前のことだ・・・メールに新型機のテストパイロットに選ばれたことを書いたのだろうか？」

金髪の男・・・ライが呆れた様子で尋ねて来る

「あ、ああ・・・」

その事を書いたと言うと

「なら、検閲に引っかかったと見て間違いないな・・・普通なら、機密漏洩で嚴重に処罰されるところだぞ？」

若干睨みながら言うライと話をしていると

「伝令です、サカエ・タカナカ参謀がアヤ・コバヤシ大尉以下2名をお呼びです」

参謀に呼び出され、俺達は司令室に向かった・・

「アヤ大尉、ライディース少尉、リュウセイ曹長に特別任務を与える、イングラム少佐、説明を」

司令室に着くなり、特別任務を与えられ、イングラム少佐から説明を始める

「我々が進めている『SRX計画』の試作機の組み上げ作業が終了した、以後、お前達には機体の調整作業を手伝ってもらう」

SRX計画?・・・それが気になり

「教官、質問!そのSRX計画って・・・何ですか?」

少佐に尋ねると少佐は

「最近、地球各地に出没している未確認物体・・・通称『エアロゲイター』に対抗するための特殊人型機動兵器を開発する計画だ」

エアロゲイター?聞き覚えの無い単語に首を傾げながら

「エアロゲイター?それって、もしかして・・・あの時の・・・」

初めて戦った機械の事を思い出していると

「そう、幕張で、あなた達を襲った虫型の機動兵器・・・コードネー

ム、AGX-01『バグス』を持つ敵対集団のことよ」

説明を受けながら思いつきで

「あ、わかったぜ！ロボットアニメとかよく出てくる宇宙からの侵略者って奴だろ！？」

冗談で言ったのだが・

「「・・・」」

皆黙り込む・それに慌てながら

「ひよ、ひよつとして・・・マジ？ホントに異星人なのか！？」

少佐に尋ねると

「・・・」

少佐も黙り込んで込む・それに慌てながら

「あの虫メカって、こないだの飛行ロボみたいに・・・謎の組織が秘密で作ってた奴じゃないのか？」

戦闘機に手足を付けた、ロボットの事を思い出しながら尋ねると

「今はエアロゲイターの正体を言及する時ではない・・・重要なのはSRX計画の試作機を、お前達が上手く扱えるかどうかだ」

質問を許さないと言いたげな強い口調の少佐に続いて

モニターに三体のパーソナルトルーパーの映像が映し出された

「こ、こいつは・・・パーソナルトルーパー・・・？ しかも、3機も・・・」

俺がその機体に驚いていると

「これらがお前達にいずれ与えられることになる試作機・・・『Rシリーズ』だ」

Rシリーズか・・・どれが俺の機体になるんだろう？

「なお、今後の特別任務遂行にあたり、お前達のチームを『SRXチーム』と呼称する」

参謀がチームの呼称を教えてくれる、俺は

「SRXって・・・何の略だ？」

チームのSRXは何かと？尋ねると

「それはいずれわかる。では、お前達にスペックデータと操縦マニュアルのファイルを渡す、三日以内にそれらを熟読しておけ。以上だ」

少佐から分厚いファイルを渡され

「熟読って・・・睡眠学習機とかないのかよ？」

アヤに尋ねると

「寝てる間に・・・って奴？」

尋ね返してくるアヤに

「そうそう」

そういう奴だと言うと・・・

「そんな便利な物があつたら、とっくに使ってるわよ・・・あなたを
気絶させてからね」

さらりと怖い事を言うアヤに

「うへっ・・・勘弁してくれよ・・・」

頭を掻きながら勘弁してくれと話していると、少佐は参謀に呼ばれ
部屋から出て行った・・・それから3日後・・・俺達は北極に派遣され
た、そこで俺は再びあの戦闘機と出会う事になる・・・

「ふむ・・・思ったより・・・性能が良いな・・・」

私はヴァルグレインの足元にテントを張り、そこで渡されたカタロ
グスペックを見ながら呟いた・・・どうやらヴァルグレインの能力は
相当高いようだ、ロボットの操縦の素人の私でもそこそこ戦闘出来
ているのは、やはりこいつの性能のおかげだろうと考えていると

「ピピッ・・・北極方面に強いエネルギー反応あり・・・」

ヴァルグレインのAIからの報告に

「北極か・・・行ってみるとするか・・・」

私はコックピットに乗り込み、ヴァルグレインを変形させ最高速度で北極に飛んだ・・・

「酷い有様だな・・・」

基地は殆ど破壊され、酷い有様だった・・・辺りを見回しながら飛行していると

「あれは！」

灰色の機体目掛けて青紫色の機体が剣を振り下ろそうとしていた・・・

「やらせるか！！」

一気に加速し灰色の機体を弾き飛ばすと同時に、機体を変形させ

「はあああっ！！」

腰のビームソードを抜き放ちその剣を弾き飛ばした・・・

「何なんだよ・・・あれは・・・」

俺は信じられなくて呟いた・・・戦闘機から一気にパーソナルトルーパーに変形した、あの機体に目を奪われた・・・美しい蒼い装甲を持ち・・・俺のゲシュペンストとは比べられない程、軽やかに動く機体に目を奪われていると

「リュウ！！大丈夫！？」

アヤとライが合流してくるが

「何だあれは！」

2人ともあの蒼い機体に驚いていた・・・ゲシュペンストより更に人型に近い機体は、グランゾンと交戦していた

ガキーンッ！！！！

グランゾンと蒼い人型の剣がぶつかり甲高い音を立てる・・・信じられない事だが・・・

「あいつと互角にやりやってやがる・・・」

グランゾンは特機、蒼い人型はパーソナルトルーパー・・・力の差は歴然のはずなのに

「押してる・・・」

蒼い人型がグランゾンを圧倒している・・・グランゾンの攻撃は掠りもせず、逆に蒼い人型の攻撃は確実にグランゾンにダメージを与えている

「信じられない・・・あの機体は一体・・・」

蒼い人型は左腕をグランゾンに叩き付ける、一瞬左腕が止まるが、直ぐにグランゾンの装甲に突き刺さると同時に炸裂し、装甲を穿つ

「うっ・・・」

グランゾンは堪らず後退するが

シュンッ！！

直ぐに間合いを詰め、グランゾンの装甲を蹴り付け、電撃を纏った右腕で殴りつける

ズガガガッ！！！！

凄まじい音を立てて右拳、グランゾンの右肩を抉り取る

ガコンッ！！

両肩が開き、連続でミサイルが叩き込まれる

ドンッ！！ドンッ！！

ゼロ距離でミサイルが次々炸裂するが、爆風は全てグランゾンの纏うフィールドで無効化されていた・・・蒼い人型は肩から柄のような物を取り出し構えようとした瞬間

「待ってください、私は貴方と戦うつもりはないのですが？」

柔らかい口調で話しかけるグランゾン、その装甲はあちこち陥没している・・・それほどまでに蒼い人型の攻撃は強烈だったのだ・・・柔らかい口調で話しかけているが蒼い人型からは反応がない・・・

「やれやれ・・・話をする気は無いと言う事ですか・・・」

グランゾンはその場から大きく距離を取ると・・・

「おや？ この反応は・・・」

シュウが何かを呟くと同時に、白銀の装甲を持ったロボットが現れたが、グランゾンが消えると直ぐに消えて行った・・・

「あの人型機動兵器・・・パーソナルトルーパーではない、・・・それにあの蒼い人型は・・・」

蒼い人型の方を見ると

「・・・・・・・・」

ゴオオッ・・・

蒼い人型は戦闘機に変形すると、直ぐ飛び去った・・・

「あれは一体・・・そうだ！！リュウ、無事なの！？返事をして！リュウ！」

アヤの声が聞こえたが・・・俺は返事を返す事が出来なかった・・・ゲシュペンストの残骸を見ながら・・・

（ま、まるで・・・ゲームみたいにあっけなくやられちゃった・・・
こ、これが・・・本物の戦争だったのか・・・？）

俺は初めて自分が戦場に居ると言う事を実感していた・・・その頃極
東支部基地では・・・

「司令！ 南極基地でシログネが！！」

サカエがレイカーにシログネの事を言おうとすると

「わかっている」

レイカーはそれを手で制し、モニターを指差す

「こ、これは・・・！？」

サカエはその映像を見て、目を見開く

「彼らの声明放送だ・・・先程から、全世界に向けて流されている・・・」

レイカーは手を組みながらモニターを見た

「・・・もはや、人類は逃げ場を失った！我々に必要な物は、方舟で
はなく、異星人に対抗するための剣なのだ！！よって、私はここに
秘密結社ディバイン・クルセイダーズによる地球の武力統一を宣言
する！これは人類が生き残るための戦いである、正義と平和の名の
下に、振り上げられた剣の下に・・・人よ集え、人よ戦え！我らディ
バイン・クルセイダーズと共に、人類の新しい未来を作り出そうで

はないか!!」

その映像を見ながらレイカーは

「ついに本性を現したか、ビアン・ゾルダーク・・・」

レイカーはイングラムに

「イングラム少佐、どう思うかね？」

イングラムに尋ねると、イングラムは冷静に

「ビアン・ゾルダーク博士率いるEOTI機関・・・いえ、ディバイン・クルセイダーズによる実質上の宣戦布告だと考えます」

宣戦布告だと考えると言うとレイカーは

「ならば、グランゾンや君達が接触した飛行型の兵器は」

グランゾン等の兵器の事を言うと

「ええ・・・彼らがこの日のために用意した物だと見て間違いないでしょう」

イングラムは冷静にこの日のために用意した物だと言う

「た、たかだか一組織の勢力で我々連邦軍全てを敵に回すつもりなのか、ビアン博士は・・・!?」

サカエ達がDCの事を話している頃・・・

「ビアンゾルダーク・・・接触してみるか・・・」

異世界の男・・・八神龍也はそう呟いていた・・・

第3話に続く

第2話（後書き）

次回は少し間隔があくかもしれませんが、本作をよろしくお願い致します

それでは失礼いたします

第3話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！OGの第3話目です！！それと現在機体のアイデアを募集しています！！PTサイズと準特機・ヴァルグレインとの合体できるというイメージの機体と合体後の機体を募集しています！！ですのでPT、準特機、合体後の3セットで感想かメッセージのほうにお願いします、

前書きが少々長くなりましたが・・本編始まります

第3話

第3話

「そうだ・・・これで良い・・・今人類には強烈な刺激が必要なのだ・・・」

私は自室でそう呟いた、彼はDCのリーダー・・・ビアンゾルダークだ・・・彼は疲れた様にワインに手を伸ばそうとした瞬間

「何者だ・・・」

部屋の隅を見ずに呟いた・・・すると

「流石と言うべきですか・・・気配は完全に消していたつもりだったんですが・・・」

浮き出るように銀髪の男が姿を見せる

「それで君は何者だ？」

警戒しながら尋ねると

「私の名は八神龍也・・・しがない・・・パーソナルトルーパー乗りですよ」

にこやかに笑う龍也に

「立ち話もなんだ・・・座ると良い」

敵意が無い事に安心し座るように言うと

「どうも」

頭を下げ椅子に腰掛ける龍也に

「それでそのしがないパーソナルトルーパー乗りが何のようだ？」

睨みながら言うと

「いえ・・・貴方と話してみようと思ひまして・・・業と悪役になろうとする・・・貴方の話を聞きたいと思ひまして・・・」

！！・・・私の考えている事を当てる龍也に

「ふっふ・・・面白い男だ・・・そうかお前はあの蒼い人型のパイロットか・・・」

最近現れる未確認の事のパイロットかと言うと

「あれはヴァルグレインと言います」

笑いながら機体名を教えてくれる龍也に

「それでここに来たという事は・・・私の仲間になるという意味があるという事か？」

仲間になる気があるのか？と尋ねると

「そうですね・・・DC全体が貴方のような者なら仲間になる事もあったと思いますが・・・残念ですが・・・私は貴方の仲間になるつもりはありません・・・」

断るという龍也に

「そうか・・・残念だ・・・私の真意を理解してくれる良い部下になると思っただがな・・・」

残念だと遠まわしに言う

「申し訳ない・・・ビアンゾルダーク・・・次に会うときは恐らく敵同士になるでしょう・・・それでは失礼を・・・」

龍也がアイドネウス島を後にした頃、佐世保基地にDCの手が伸び始めていた・・・

俺達は出撃命令を受けて佐世保基地に向かった・・・そこでは戦闘機が3機と緑色のゲシュペンストが戦闘を行っていた

「う・・・基地や・・・街がやられてる・・・!」

俺は北極でのグランゾンの事を思い出し、手が震えた・・・

「どうした、リュウセイ・・・臆病風に吹かれたか?」

隣の黄色の機体・・・シュツツバルトに乗るライから嫌味が来る・・・それに

「う、うるせえ！」

うるさいと怒鳴っていると

「リュウ、ライ、DCの戦闘機を撃破するわよ！」

俺のゲシュペンストと同型機に乗るアヤから指示が出る

「了解です、大尉」

ライはM950マシンガンを構えるが・・・俺は武器を構える事が出来なかった

「リュウ、しっかりしなさい！敵は目の前にいるのよ！」

武器を構えない俺にアヤから怒声が入る

「わ、わかってるよ！」

俺はその声に反応し、メガビームライフルを構えた・・・そのやりとりを見ていた戦闘機のパイロットが

「おいおい！何だよ、あいつビビってんのか？」

ジャーダがミサイルを放ちながら呟く

「さあ？まだ新米じゃないの？」

ガーネットが返事をしながら敵の戦闘機を追い詰める

「チッ、素人をPTにさせるぐらいなら、俺達に回せってんだよなあ」

ジャーダは舌打ちをしながら追い詰めた戦闘機を打ち落とした頃

「リュウセイ、ここが正念場だ・・戦えないのならPTから降りろ」

ライからPTから降りろと言われ

「何だど・・！？どういう意味だ？」

どういう意味だ？と尋ねると

「臆病者に味方を救うことなど出来ない・・それに、数少ないPTが無駄になるだけだ」

こんな時まで嫌味を言うライに

「こ、この野郎！言わせておけば！！」

怒鳴るとライは

「怒る余裕はあるようだな・・なら、自分が何をすればいいのか考えることも出来るはずだ」

諭すように言うライに

（・・そうだ・・！ここで戦わなきゃ、味方や基地がやられちゃう・・！！南極の時みたいにな・・！戦わなきゃ、終わっちゃうんだ！）

俺は自身のやる事を理解し、ライフルを構えた

ヒュンッ!!

戦闘機が旋回しながら迫ってくるが

「遅せえっ!!」

エアロゲイターの兵器と比べるとその速度は遅い・・・余裕を持って回避しライフルで打ち落とす・・・

「へえ・・・素人かと思ったけど・・・中々やるじゃない・・・」

その動きを見てガーネットが呟く、その間に

「遅い・・・」

ライの駆るシュツバルトが両肩からビームキャノンを放ち、2機の戦闘機を打ち落とす

「そこっ!!」

アヤのゲシュペンストが放った、T-LINKリッパーで戦闘機を両断する

「ふん!! ジェットマグナムッ!!」

緑色のゲシュペンストが戦闘機を殴りつけ破壊する・・・暫くそのやりとりを繰り返していたが・・・ぷつぷつと援軍が来なくなる

「妙だな・・奴ら、例の新型機も繰り出さずに、こうもあっさりと引き上げるなんてよ」

ジャーダとガーネットが話していると

「！あれはタウゼントフェスラー・・イングラム教官か？」

俺達の近くにタウゼントフェスラーが現れる、そして

「各機へ。敵の戦闘原潜と思われる物体からMAPWの発射が確認された、直ちに、この戦域から離脱せよ・・なお、PT各機及び付近の生存者は本機で収容する」

イングラム教官から撤退命令が出る

「何！？MAPWだと！？」

緑色のゲシュペンストに乗るカイ少佐が驚きの声を上げる・・だが俺はMAPWの意味が判らず

「MAPWって・・何なんだよ！？」

ライに尋ねると

「大量広域先制攻撃兵器だ」

ライが俺に説明しながらタウゼントフェスラーに乗り込もうとする

「戦闘原潜から発射されたMAPWなら・・非核戦術ミサイルの可

能性が高い」

冷静に言うライに

「そ、それって・・・どういふことになるんだよ!？」

炸裂すればどうなると尋ねると

「命中すれば・・・基地は跡形もなく吹き飛ぶ」

他人事の様に言うライに

「な・・・何だって!？」

跡形もなく吹き飛ぶという事に驚いていると教官から

「急げ。MAPW飛来まで時間がない」

早く乗り込めと言う教官に

「ま、待ってくれよ、教官!」

待ってくれと言うと教官は

「命令が聞こえなかったのか?リュウセイ曹長・・・」

睨みながら言う教官に

「何言ってるんだ!基地を見捨てて逃げるってのかよ!」

逃げるっていうのかよっ!! 怒鳴ると

「・・・撤退を急げ」

撤退しろと繰り返す教官に

「!そ、そんな命令聞けるか!俺がMAPWをブチ落としてやる!そうすりゃ・・・」

ライフルを構えようとする

「いい加減にしろ、リュウセイ!」

さっきまで黙って聞いていたライが怒鳴り声を上げる

「軍人にとって、上からの命令は絶対だ」

だから早く乗り込めと言うライに

「な、何だと・・・!てめえはそれで平気なのかよ!?!」

平気なのか!?!と言うとライは

「・・・俺達の機体や武器でMAPWを狙撃することなど不可能だ・・・ましてや、貴様ごときの腕では・・・」

俺の腕では無理だと言うライに

「だ・・・だったら、てめえがやれよ!コロニー統合軍のエリートだったんだろ!?!」

お前がやれと言うと

「・・・イングラム少佐の命令に従って撤退するぞ、リュウセイ・・・」

ライ達はタウゼントフェスラーに乗り込んだ・・・

「何をしている、リュウセイ曹長・・・？」

早く撤退しろと言う教官に

「う・・・くっ・・・！逃げるしかねえのかよ！！くそっ・・・！くっそ
おおおおおっ！！」

俺がそう叫びを上げると同時に

ゴオオオオッ！！！！

北極で現れた可変形のPTが現れ

ジャキンッ！！

大型ライフルを構える

「あいつ・・・打ち落とすつもりか！！」

カイがそう呟くと同時に

ドオンッ！！

ライフルの弾がミサイルを打ち落とすが・・・ミサイルの爆風で基地の設備は殆ど破壊された

「味方なのか・・・」

ジャーダは味方なのか？と呟いた瞬間PTは再び戦闘機に変形し飛び去っていった・・・俺達はあのPTによって救われた基地を見ながら極東支部基地に戻った・・・

「放せ・・・！」

俺は基地に着くなりライの襟首を掴んだ

「てめえ、さっきのありや何だ！？上から出た命令を聞きや、それでいいってのかよ！！あのPTがミサイルを打ち落としてくれたから良かった物の！！」

そう怒鳴ると

「あのPTが味方だとは限らない・・・俺達を油断させる為の罠かもしれない！」

あのPTが敵かもしれないと言うライと怒鳴りあっていると

「2人とも止めなさい！！喧嘩してる暇が合ったら、報告書でも作ってなさい！！」

アヤに怒鳴られ、俺達の言い合いは終わった・・・その頃司令室では

「・・・報告は以上であります」

カイ少佐が報告をしていた・・・

「佐世保基地はほぼ壊滅状態・・・あの謎のPTのおかげで最悪の事態は間逃れたが・・・暫くは使い物にならない・・・」

参謀がそう呟くとレイカーは

「謎のPTか・・・イングラム少佐はどう思う？」

イングラムに尋ねると

「そうですね・・・かなりの凄腕のメカニックが作った機体としか言いようが無いですね・・・」

レイカー達がヴァルグレインの事を話している頃・・・山中で

「どうやら・・・私が着く方は決まったな・・・」

龍也がどちらに味方するか・・・決めていた・・・異世界の男が介入する事でこの世界の歴史は大きく変わって行く・・・

第4話に続く

第3話（後書き）

次回はまた不定期になると思います・・・夜天が未完結なのでそちらのほうにしゅうちゅうしてしまうので・・・楽しみにしている方には申し訳ありませんが・・・ご了承ください・・・それでは次回の更新のときにまたお会い致しましょう

第4話（前書き）

どうも〜混沌の魔法使いです！！

ナイトオブガーディアン第4話の更新です！！！！これと同時に守護者の最新話も投稿したので感想が貰えると嬉しいです！！それではどうぞ！！

第4話

第4話

「なあ、スカリエッティさん、まだ次の機体は完成せんのか？」

私がコンソールを叩くスカリエッティさんに尋ねると

「すまないねえ、流石にこれくらいのロボットの作成は初めてでね、良く判らないんだ」

私達の前には2機のロボットが立っている、1機はしゃくだがなのはちゃんの機体で、もう1機はヴィータの物だ、2人は今操縦の訓練中だ、他の機体はまだ骨組みしかできていない・・

「合体、というのが難しくてね・・二号機、三号機も合体用のプログラムと装甲を組み込めれば完成なんだが・・そう簡単には行かないよ」

そう笑うスカリエッティさんを見ながら

「はよ、兄ちゃんどこ行きたいなあ・・」

私は三号機を見上げながら呟いた、兄ちゃんの居る世界はいま戦争中だそうで、大変危険と聞いている、だから早く兄ちゃんの顔を見て安心したいと考えていると

「焦る事はないさ、ヴァルグレインは最高の機体だ、そう簡単に堕ちはないさ」

機動六課の地下ではやてとスカリエッティが話している頃・・・OG
世界の龍也は・・・

「成る程・・・ラングレー基地は既に破壊されているか・・・ATX計画とやらの試作機がどうなったが判らんが・・・今から合流するのは無理・・・なら・・・極東支部基地にあるハガネ・・・だったか・・・それに乗るのが得策か・・・」

私はヴァルグレインであちこちの基地にハッキングを仕掛け、手に入れた情報を纏めていた・・・

「それにそろそろ・・・テント暮らしも辛いしな・・・」

私はそう呟いた・・・テント暮らしも今日で2週間・・・そろそろ辛くなってきた・・・

「さてと・・・そろそろ・・・行くとするか・・・」

私はテントを片付け、ヴァルグレインに乗り込んだ・・・その頃極東支部基地にDCの魔の手が伸びていた・・・

「むっ・・・戦闘中か・・・」

私はレイカーと言う司令官に会い、ハガネに乗り込ませてもらうと思っていたが・・・戦闘中なら話は別だ

「ここは・・・援護をして味方だと認めて貰うか・・・」

私はそんな事を考え、フライヤーモードのまま戦場に飛び込んだ・

「フルーバースト・蹴散らせッ!!!」

基地の上空を飛び交うリオン達と見た事の無い黒い機体目掛け、全砲門を開き全弾打ち込む

バウッ!!!ズガガガッ!!!

ミサイル、ビームキャノン、ガンスマッシャーからのビームマシンガンが一斉にリオン達目掛け降り注ぐ・

ドガンッ!!!ドガンッ!!!

5体のリオンを打ち落としたが、1機だけ黒い指揮官機が突撃してくる・・・

「成る程・・・良い腕のパイロットも居るのだな・・・」

フライヤーからPTに切り替え即座に左腕のリボルビングバンカーを繰り出す・

ガキキッ!!!

黒い指揮官機の歪な形の剣をバンカーが追突し火花を散らす・・・お互いに距離を測る・

「やれやれ・・・これは骨が折れそうだ・・・」

私はそう眩き、操縦桿を握り直した・

「あいつ・・何者だ？・・ライの兄貴と互角にやりやってやる・
」

俺は思わずそう眩いた、ライの兄貴、エルザムは超が付く凄腕のパイロットだ・・それと互角に戦う蒼いPTの事を考えていると

ズガンッ！！

レールガンの弾が俺の前に撃ち込まれる・

「おっとと・・戦場で余所見は・・いけねえなっ！！」

ビームライフルを放ち、リオンの足のブースターを打ち抜く、ブースターが消えてバランスを崩すリオンに・

「これで決まりだっ！！」

プラズマステークでリオンの胴体を完全に破壊する・・さてと・・大分敵が減ってきたか・・俺は戦場を見渡した・・あの蒼いPTに敵戦力が集中し、ハガネの周りの敵は大分撃墜した・・このまま行けば、ハガネも無事に出击できるかな？俺がそんな事を考えていると・・ハガネの通信チャンネルからの報告が飛び込んでくる

「し、司令部より伝達！ 敵戦闘原潜より発射されたと思われるMAPWが伊豆基地へ接近中！」

おいおい・・・マジかよ・・・あいつら基地ごとハガネをぶっ潰すつもりか・・・こりゃ気合入れて行くとしますか・・・

俺はそんな事を考え、ゲシュペンストを走らせた・・・向かって来る戦闘機やリオンを打ち落としていていると

ドバーンッ！！！！

ハガネがその巨大な姿を現す・・・俺はハガネの姿に一安心した・・・ハガネ装備ならミサイルを撃破することは容易いからだ・・・そろそろ砲門が開くかな？・・・そう思いハガネを見るが

「・・・おいおい・・・まさか故障とか言わな・・・」

俺がそう言い掛けるとオープンチャンネルで

「こちら、イングラムだ。R-1用のブーステッド・ライフルを射出してくれ」

少佐が打ち落とすと言った瞬間・・・

「だから、俺にそいつをやらせてくれ！」

ハガネの甲板にトリコロルのPTが現れる・・・

「R-1・・・動くのか？」

確かまだ調整が済んでない筈・・・そんな機体が動くのか？・・・俺がそんな事を考えているとR-1のカメラアイから光が消える・・・

「ちいっ!! やっぱ動かないかつ!! こうなったら俺が・・・」

一番ハガネに近い俺がブーステッド・ライフルを受け取りに行こうとすると、R-1の通信機から悲鳴にも似たリュウセイの声がする

「くそっ・・・動け、R-1! 動いてくれえっ!! 俺達は何のために、ここにいるんだ!? 答えろ、R-1!! みんなを・・・DCやエアロゲイターから救うためじゃないのか!? ここで動かなかったら、お前は何のために作られたんだ!? R-1、答えろおっ!!」

リュウセイのその叫びの呼応するように再びR-1のカメラアイに光が灯る・・・

「漫画じゃねえけど・・・R-1がリュウセイの叫びに答えたって訳か・・・」

俺がそう呟くと同時にR-1から放たれた弾丸がミサイルを打ち落とした・・・

「敵戦闘原潜の撤退を確認。防衛ライン乙までの針路、クリア」

通信士のリオに続き

「カイ少佐の機体を除いた本艦所属のパーソナルトローパー、及び戦闘機の着艦終了」

エイタの報告を聞いていると、ダイテツ艦長が、

「あの機体・・・こんどは消えんのだな・・・」

ハガネの前には未確認の蒼いPTが滞空している・・・あのPT何が目的なんだ・・・俺がそんな事を考えていると

「蒼いPTから通信が入ってます、どうしますか繋がりますか？」

リンの問いに頷くとモニターに1人の男が映し出される

「初めまして、私はヴァルグレインのパイロットの八神龍也と言います、宜しければ着艦許可を頂けませんか？」

にこやかに尋ねて来る男に

「構わんよ・・・着艦許可を出そう」

ダイテツ艦長が着艦許可を出すと

「ありがとうございます」

龍也は穏やかに微笑むと通信が切れた、それと同時にダイテツ艦長が艦長席を立ち格納庫に向かい歩き出す、俺も後を追う格納庫に向かった・・・

ザワザワ・・・ミーティング後の格納庫の中はざわついていて・・・無理も無い・・・今まで神出鬼没のPTが自分達の目の前にいる・・・驚くのも無理も無い・・・俺がそんな事を考えていると

バシユッ!!!!

蒼いPTのコックピットが開き、その中から男が飛び降りる

「!」

20m近いPTから飛び降りるなんて・・・何を考えているんだっ！
俺がその事を驚いていると

スタンッ!!!!

軽い音を立てて、流れるような銀髪に透き通る様な蒼銀の瞳を持った男・・・龍也が着地する・・・それと同時にピリピリと空気が張りつめる・・・龍也の放つ雰囲気硬直していると

「こうして言葉を交わすのは初めてだな・・・八神龍也」

ダイテツ艦長が一步踏み出し、手を差し出すと

「そうですね」

穏やかに微笑みその手を握り返す龍也にダイテツ艦長は

「それでお前の目的は何だ?・・・DCの味方ではないが・・・連邦の味方でもない・・・それがわしの前に居る・・・その真意を聞きたい」

鋭い眼光で言うダイテツ艦長に龍也は笑いながら

「単刀直入に言いましょう・・・私をハガネに乗せて欲しい、DCと戦う為に」

笑いながら言う龍也にダイテツ艦長は

「何故急にそんな事を言い出すんだ？」

睨みながら言うダイテツ艦長に龍也は

「DCのやり方が気に食わないと・・・それだけでは不服ですか？」

挑戦的な笑みの龍也に

「・・・判った・・・協力者として迎え居れよう」

ダイテツ艦長がそう言うのと龍也は笑い

「ありがとうございます、私に出来る事は限られていると思います
が、宜しく願います」

格納庫に居るパイロット達の顔を見ながら言う龍也に

「おお、宜しくな！！・・・俺っリュウセイって言うんだ、宜しく
なっ！！」

リュウセイが笑いながら手を差し出す、リュウセイに龍也は

「元気がいいな・・・宜しくリュウセイ」

穏やかに笑う龍也にリュウセイは

「そうだ！！俺が案内してやるよ！！」

リュウセイが龍也の手を引いて格納庫から出て行ってしまった・
俺はリュウセイの行動に

（すこし無用心じゃ・・いや・・無理も無いか・・リュウセイは何
度も助けられてしな・・）

北極でのグランゾンとの戦闘・・佐世保での基地に迫るミサイルの
撃破と・・元々リュウセイは蒼いPTには友好的だったからな・・
この行動は無理も無いか・・俺がそんな事を考えているとダイテツ
艦長は

「そういう訳だ、これから八神龍也は民間協力者として、DCと共
に戦う仲間だ、よろしくしてやってくれ」

そう言い残し、ダイテツ艦長は格納庫を後にした・・この瞬間この
世界は正史とは違う時を歩み始めた・・

第5話に続く

第4話（後書き）

今回は少し短めです、次からは基本龍也視点でOGの話を進めて行こうと思います！！基本的なカップリングはOGの間々で進みます！！私はちなみにOGでのカップリングはリュウセイにラトとマイの組み合わせが好きです、鈍感なリュウセイに年下のコンビというのがつぼです、読者の方はどうでしょうね？・・・まあひとそれぞれだと思いますが私と同じ考えの人が居ると嬉しいです、それでは失礼致します

ちょっと思いつきの話 おまもり猫と夜の守護者（前書き）

今回は思いつきの番外編です！！弟が嵌っている漫画と夜天の守護者をクロスしてみました！！思いつきなので続編が出来るかは自信がありませんが見てくれると嬉しいです！！それでは思いつき番外編「おまもり猫と夜の守護者始まります」

ちょっと思いつきの話 おまもり猫と夜の守護者

第1話

それは龍也のある一言から始まった・・

「そう言えば・・私学校を卒業してないな・・」

龍也は卒業前に行方不明になったので、中学を卒業してないのだ、それにせつかく内定していた高校も行けずしまいなのだ・・その眩きを聞いたスカリエッティは

「龍也・・学校に行きたいのか?・・それなら私にいい考えがある
!!」

胸を張りながら言うスカリエッティの話を聞くにつれて、龍也の顔が笑い顔になる

「成る程・・その手が合ったか・・」

感心する龍也にスカリエッティは

「どうだ?これなら学校に行ける!!まずは平行世界に行く、そして魔法で年齢を誤魔化す!!そうすれば普通に溶け込めるはずだ」

その日の夜・・龍也は平行世界にへと向かった・・次の日の朝・・

「ええ!!兄ちゃん学校に通う為に平行世界に行ったてえ・・ええ

っ！！！！！」

はやての悲鳴が六課に木霊した・

朝早く道路の歩く男女の姿が合った・男は優しそうな顔をしているが涙目でティッシュで鼻を押さえていた・彼の名は「天河優人」もう1人は少し怒ったような顔をしている少女「九崎凜子」だ・2人が歩いていると

「主が天河優人か」

竹刀袋を持った少女に話しかけられた・

「君は・・・？」

俺がそう尋ねると、少女は一瞬で俺の背後に回り

「ふん・なかなか、男前になったのお・度胸の方はどうじゃ？・」

ふっ・首筋に息を吐きかけられる・それを見て凜子が

「な・・なっ・・遅刻っ！！遅刻するよっ！！はいさよならっ！！」

俺の首を掴んで走り出す・暫く引っ張られた所で

「凜子っ！！あぶない！！」

道影から長身の男が現れる・・・走っていた凜子は急に止まれず

「えっ・・・きゃああっ！！！！」

男とぶつかる・・・その衝撃で凜子の鞆から筆記用具や教科書が飛び出るが・・・次の瞬間

男の右手が一瞬視界から消える、そして

「すまない・・・余所見をしていたんだ・・・」

凜子の鞆を持ちながら頭を下げる・・・漆黒の服に身を包む男から凜子は立ち上がりながらその鞆を受け取り

「ごめんなさい、私も余所見をしてたんで・・・」

謝りながら言う凜子に男は

「その制服、桐陵高校の物だな・・・君達さえ良ければ・・・私を学校まで案内してくれないか？・・・道が判らないんだ」

穏やかに笑う男に

「良いですよ、こっちです」

俺達は男を案内しながら学校に向かった・・・

「ざわざわ・・・」

通り過ぎる人が男の顔を見て驚く、こちら辺では珍しい銀髪に神秘的な蒼銀の瞳の男の顔を物珍しそうに見ている・

「そういえば・・・名前は何ていうんですか？」

凜子が名前を尋ねると男は笑いながら

「龍也、八神龍也だ、」

！日本人の名前・・・外人かと思っていた俺達が驚いていると

「こんな髪と目をしているから外国人かと思っていたかね？」

からからと笑いながら言う龍也に

「すいません・・・」

俺が謝ると龍也は笑いながら

「なに、気にする事は無い・・・それが普通の反応だよ」

穏やかに笑いながら歩く龍也に

「それで学校に何のようですか？」

何か話をとおり尋ねると龍也は

「何、転入の手続きにね」

どうやら龍也は転入生だったようだ・・・背の高さと大人っぽい雰囲気

気だから3年生かな?・・・そんな事を考えていると

キンコーンカーンコーン

学校からチャイムが鳴る・・・話し過ぎてHRの時間になってしまったようだ、俺達がそれに慌ててると

「む・・・私の所為で遅刻させるのは悪いな・・・どれ・・・少し我慢してくれよ」

龍也がそう言うのと軽々と俺と凜子を背中に背負い、走り出す

「うわああああっ!!!」

速い!背中に2人背負っているのにそれを感じさせない速さで走る龍也、その速さに振り落とされないようにしがみ付いていると、学校の前の横断歩道の信号が赤信号に切り替わる

「うう・・・遅刻しちゃうよ」

背中の凜子が言うのと龍也は

「大丈夫だ、私が遅刻等させない・・・2人ともしっかり私の服を掴んでいろ・・・」

そう言うのと龍也が大きく助走を取る・・・その行動に

「まさか・・・横断歩道を飛び越えるつもりですか?」

俺がまさか?と言う顔で尋ねると

「そうだが？何か問題あるか？」

えっ・・・俺達が停止している中、龍也が走り出した

「つてえええええっ！！！！！」

ドップラー効果で悲鳴が伸びていく・・・無理だ・・・横断歩道を飛び越えられるわけが・・・俺が目をつぶると

ダンッ！！！！！！

力強く地を踏みしめる音と共に体が宙に浮くのを感じた・・・恐る恐る目を開くと同時に

スタンッ・・・

軽い音を立てて龍也が着地する・・・信じられない事だが・・・龍也は軽々と横断歩道を飛び越えたのだ

「さてと・・・行くか・・・」

再び走り出した龍也の背中にしがみつく・・・暫く走るとギリギリ正門が閉まる前に学校の前に到着した

ズザザザッ！！！！

音を立てて龍也がブレーキを掛ける、今日正門の当番の俺達の担任の如月先生が

「随分と派手な登校だな？九崎、天河？」

からかうように笑う如月先生を見ながら龍也の背から降りていると、
如月先生が

「そんで？お前何者だ？見たこと無い顔だが？」

龍也の顔を見ながら言う如月先生に龍也は

「明日からこの学校に通わせて貰う者です、挨拶にと思ったのですが・・・道が判らなくて迷っていたら、この2人が道案内してくれたんですよ」

笑いながら言う龍也に如月先生は

「ほーそれは感心な事だ、私はこいつを職員室に連れて行く、私が教室に戻る前に教室にいれば、遅刻じゃないからな、ほれ来い」

そういつて歩いて行く如月先生と龍也を見ながら俺達は教室に向かった・・・

「それでお前は何歳だ？・・・」

職員室で年齢を尋ねて来る如月先生と呼ばれた女性に

「私は16歳です」

年齢を言う・・・今のこの姿は魔法で16歳の頃の私を再現している、

16歳だと言うと

「16か・・・となると・・・私の生徒になる可能性がある訳だ・・・ん、判った・・・ちゃんと手続きはしておいてやるから今日は帰れ、えっと・・・これとこれを持っていけ、学校の備品の売ってる店だ、そこで制服と教科書を買って来いよ」

渡された紙には丁寧に地図まで書かれていた

「今日この町に来たばかりなんだろう？地図を描いと言ってやったから迷うなよ」

笑いながら言う如月先生に礼を言ってから私は学校を後にした・・・明日から学生生活か・・・戦いの無いゆっくりとした生活・・・悪くないな・・・そんな事を考えていると

キン・・・

頭の中に音が響く・・・私はそれに顔を顰めた・・・

「やれやれ・・・戦いの無い生活と言うのはどうやら違うようだ・・・」

近くではない・・・だが・・・確実に判る・・・この気配は・・・

「ネクロ・・・か・・・この世界にも生き残りがいるとはな・・・」

私は肩を竦めながら買い物を通り、自宅に戻り・・・明日の学校の準備をしていると

「ん？・・・妙な気配だ・・・この方角は・・・学校か・・・見に行ってみ

るか・・・」

妙な気配を感じ外に出かけようとする、その気配が消える・・・

「何者かによって倒されたか・・・どうやら・・・敵はネクロだけでは無いようだ・・・」

私はそう呟きながら学校の準備に戻った・・・

第2話に続くかもしれません

ちょっと思いつきの話 おまもり猫と夜の守護者（後書き）

どうでしたか？おまもりひまりとクロスしてみました・・弟がこの手の漫画が好きで良く集めてるんですね・・ネギまとかTOLA VEるとか・・迷い猫オーバーランとか・・私はこの手の漫画は余り見ませんね・・私ははじめの一步やグレンラガン、ブリーチ等の熱血系に、金田一シリーズにスパロボOGの漫画が好みなんですけど、弟の進めで何を考えたかクロスしてみました・・改めて考えると何故クロスをしたのか大変謎です・・なんでやろうと思ったんでしょう？・・思いつきですね・・判ります・・これは思いつきの話なので次話があるとはいえませんが、何故なら未完結の作品が二作有るからです！！もし見たいという意見があれば、どちらかの完結後に投稿したいと思います、それとフェイトのPS2版を購入しました・・中古でPSPのおまけつきで2980円・・そこそこ良い値段だと思っています・・現在プレイ中ですが・・見たいEND無限の剣製ところの話ではなく、タイガー道場のお世話になってばかりです・・ですので攻略を教えてくださいの方がいましたら、活動報告のコメントかメッセージに送ってくれると嬉しいです！！それでは失礼致します！！それと明日は本編の更新なので見に来てくれると嬉しいです！！それでは失礼致します

パイロットステータス（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は龍也達のステータスをOG風にして投稿したいと思います！！基本的にはOGの物は解説なしでオリジナルの物には解説をつけていきます！！龍也達のステータスがかなり反則ですが温かい目で見てください！！

パイロットステータス

八神龍也

能力

格闘 196 射撃 196 技量 200 防御 230 回避 280 命中 280 回

特殊能力

天才 指揮官L9 ヒット&アウェイ 決意 気力130以上で発動、格闘、技量、命中、防御+20 守護者の誇り 気力140以上で発動特殊能力に援護防御L5追加+援護防御で受けるダメージ-20%+防御+30 魔道師(神王)L9 LV毎に命中、回避、防御に補正が掛かる、更に気力140以上でアタッカー、気力限界突破、Eーセーブ、ガード、見切りの特殊技能を取得する

精神 集中 必中 熱血 鉄壁 誇り 熱血、必中、閃き、突撃、集中、直撃が同時に掛かる 決意 HPとENを最大値まで回復し気力+10する

ヴィータ

能力

格闘 170 射撃 140 技量 150 防御 170 回避 199 命中 245 回

特殊能力

魔道師L7 LV毎に命中、回避、防御に補正 インフアイトL9
アタッカー リベンジ 鉄槌の騎士 気力140以上で発動、格闘武器の与えるダメージに+15%、喰らうダメージ20% 怒り ヴアルグレインのHPが減少している場合全ての武器の攻撃力+400+消費EN-15%

精神 必中 熱血 鉄壁 気迫 信頼 粉碎 相手の装甲を-5%+特殊技能を発動させない

なのは

能力

格闘	150	射撃	170	技量	160	防御	185	回避	205	命中	265
----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----

特殊能力

魔道師L7 LV毎に命中、回避、防御に補正 ガンフアイトL9
E-セーブ Bセーブ 女神L9 指定範囲にいる味方ユニットの射撃武器の与える武器のダメージ+5% エースオブエース 気力140以上で発動、見切り、ガード、アタッカーの特殊能力を得する

精神 不屈 必中 集中 狙撃 熱血 魔王 相手の気力-20、移動力-4

フュイト

能力

格闘	185	射撃	165	技量	170	防御	165	回避	255	命中	235
----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----

特殊能力

魔道師L7 LV毎に命中、回避、防御に補正 インファイトL9
ヒット&アウェイ 戦乙女 敵機を破壊した場合、気力+3、もう一度行動できる 雷神 気力140以上で発動 見切りを獲得、常時加速と回避+30

精神 集中 直撃 閃き 加速 信頼 雷神 加速、集中、必中、熱血が同時に掛かる

シグナム

能力

格闘	190	射撃	150	技量	180	防御	190	回避	190	命中	270
----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----

特殊能力

魔道師L7 LV毎に命中、回避、防御に補正 インファイトL9
アタッカー 烈火の将 気力140以上で発動 格闘武器の与えるダメージに+20% 格闘武器の射程に+2 怒り ヴァルグレ

インのHPが減少している場合全ての武器の攻撃力+600+移動力+2

精神 必中 熱血 気迫 突撃 加速 剣神 気合、熱血、突撃、加速、必中が同時に掛かる

はやて

格闘	195	射撃	190	技量	192	防御	194	回避	230	命中	250
----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----

特殊能力

魔道師L9 LV毎に命中、回避、防御に補正 夜天 ヴァルグレインと隣接している場合、回避、防御+30、気力+2 狂愛 気力130以上で発動、ヴァルグレインを攻撃した敵ユニットを攻撃する際、攻撃力+300、アタッカーを取得、更に敵の回避-10% ラプラスの魔 気力140以上で発動、敵の命中率-20%、自分の命中率+30% 憤怒 ヴァルグレインのHPが減少している場合、全ての武器の攻撃力+800、消費EN-20、敵の装甲値マイナス10%、気力-15、移動力-1

精神 集中、閃き、覚醒、再動、愛情、献身

パイロットステータス（後書き）

かなりのチート能力ですよね〜でもこれ位で丁度良いと思ってこのステータスにしました！！はやての能力が超が付く反則クラスです！！でもヤンデレ魔王ですのでこれ位が丁度いいですよ〜はやてのステータスを乗せたのは、はやての機体のアイデアを考えやすくする為の物です、はやての機体は射撃とMAP搭載型の広域殲滅型のPTにしたいと思っています！！多少反則くさい性能でも構わないのでお気軽にアイデア募集に参加してくれると嬉しいですよ！！それでは失礼致します

第5話

第5話

「んで、ここが食堂な」

リュウセイにハガネの艦内を案内して貰っていると

「ん？よう、リュウセイに龍也、お前らも飯か？」

青い髪の男に

「すみません・・・なんと呼べば良いですか？」

名前が判らず尋ねると、青い髪の男は笑いながら

「イルムで良いぜ・・・それとフルネームはイルムガルドカザハラだ」

人の良い笑みのイルムと話をしていると

「ああもう殆ど残ってねえ」

リュウセイの落胆した声に

「どうしたんだ？」

どうした？と尋ねると、リュウセイは説明を始める・・・ここは軍艦だから食事の時間がずれると残り物ばかりになってしまっんだ・・・と教えてくれるリュウセイに

「なあ・・・この厨房の設備は好きに使えるのか？」

そう尋ねるとリュウセイは

「使えるけどよ・・・俺は料理なんて出来ないぞ？・・・はあく今日は飯抜きか」

落ち込むリュウセイとイルムに

「少し待ってろ・・・今何か作ってくる・・・」

コートを椅子にかけ厨房に行こうとすると

「待てよ、お前料理できんのか？」

尋ねて来るイルムに

「それなりには・・・嫌いな物が有るなら聞いておきますが？」

嫌いな物はあるか？と尋ねると

「特に無いぜっ！！」

サムズアップしながら言うリュウセイに頷き

「イルムはどうする？食べるか？」

イルムに尋ねると

「おう、食うぜ、でも酷かったら罰ゲームだかな？」

笑いながら言うイルムに頷き、私は厨房に向かった

「どんなのが出て来んだろう？・・・楽しみだぜ」

厨房から聞こえてくる音を聞きながら言う中尉が

「食えるもんだと良いけどな・・・」

2人でそんな話を話していると

「待たせたな・・・今出来たぞ」

龍也が俺達の前に前にトレイを置く、トレイの上には大盛りのチャ
ーハンに簡単な中華スープが置かれていた

「すげえっ！！無茶苦茶美味そうだッ！！」

俺がそう言う中尉も

「確かに・・・こりゃ美味そうだ・・・早速頂くとするぜ！！」

2人でレンゲを掴み

「「頂きます！！」」

チャーハンを口に運ぶ・・・そして目を見開き

「「美味いっ!!」」

2人で思わず叫ぶ、もう今まで食べたどのチャーハンより美味しい、2人でガツガツと食べていると

「そんなに慌てて食べると喉に詰まるぞ?」

苦笑している龍也に

「ももはへほほ!! (大丈夫!!)」

口にチャーハンを含みながら言う

「ちゃんと飲み込んでから喋れ・・・」

呆れた様に言う龍也に頷きながらチャーハンを口に運んでいると

「おお・・・2人とも美味そうなの食ってるな・・・誰が作ったんだ?」

メカニックのロボが来て尋ねて来るのでレンゲを龍也に向けると

「あんたか・・・なあ・・・もしかしてまだ残ってたりしないか?・・・腹ペコなんだよ」

ロボが腹を擦りながら言うと言うと

「大の男が2人だからな・・・大目に作ってある・・・今よそって来よう・・・」

龍也が立ち上がるので、俺と中尉は空の皿を龍也に向け

「「お代わりっ!!」」

と言うと龍也は苦笑しながら

「了解・・・少し待ってろよ・・・」

その皿を受け取り龍也は厨房に向かった・・・

「「「ご馳走様でした・・・」」」

3人で手を合わせながら言うと言と龍也が

「3人とも甘い物は好きか?・・・何時ものクセでデザートも作って
しまったんだが・・・食べるか?」

そう尋ねる龍也に

「んー俺は良いや、甘いのはあんまり好きじゃないからよ」

中尉は良いと言ったが俺とロボは食べると返事を返すと、龍也は再び
厨房に消えた

「待たせたな・・・ほら」

俺とロボの前にアイスクリームが置かれる・・・バニラとチョコが1
つずつ乗っていた・・・俺とロボが食べていると・・・

「良かったら食べないか？」

龍也が離れた所に座っていたラトウーニの前にアイスを置く、ラトウーニは

「あっ・・・うん・・・貰う・・・ありがとう・・・」

一瞬困ったような顔をしたが、それを受け取りラトウーニはアイスを食べ始めた、龍也は満足気に頷き俺たちのテーブルに戻って来た・

「いや・・・美味かったよ、あんた凄いな」

ロブが言うと龍也は

「そんな事はない・・・ただ趣味の1つだからな・・・ところでお前の名前は？」

ロブの事を知らない龍也が名前を尋ねるとロブは

「ロバート・ハジメ・オオミヤだ、気軽にロブとでも呼んでくれ、それであんたの名前は？」

ロブが手を出しながら尋ねると龍也は

「八神龍也だ、龍也でも八神でも好きに呼んでくれ」

龍也がその手を握り返すとロブは

「それにして龍也のPT・・・ヴァルグレインだったか？あれを作っ

たメカニックは天才だな」

ロボが笑いながら言うと

「あいつが聞けば喜ぶよ、何せヴァルグレインはあいつが初めて作ったPTだからな」

龍也が言うところでは

「あれが始めて作ったPT!?!?・・・嘘だろう?」

嘘だろうとロボが言うところでは

「いや本当だ、前は小型の掃除ロボとかは良く作っていたが・・・PTを作ったのはあれが初めてだぞ?」

笑いながら言うところでは

「・・・天才と言うのはいる物なんだな・・・」

しみじみ言うところでは

「あいつは天才であり天災でもある・・・」

天災でもあるというところでは

「何か嫌な事でもされたのか?」

笑いながら尋ねるリュウセイに

「昔な・・マシンガン搭載の義手とか・・超高硬度のナイフを装備した義手をつけられた事がある」

左腕を擦りながら言うといルムが

「もしかして左腕・・義手って事か？」

信じられないと言う顔のイルムに

「義手だ・・ほら・・」

肩の部分から義手を外し、机の上に置くと

「うわっ・・凄いなこれは・・」

義手をまじまじと見つけるロブ

「悪いが返してもらおうぞ」

義手を再び身に付けると

「しかし・・本当に腕の良いメカニックが付いてるんだな・・今度話してみたいよ・・」

ジェイルと話をしてみたいと言うロブに

「その内機会があればな・・」

龍也がハガネのクルーと打ち明けている頃、ミッドでは

「カタカタ・・良し・・調整完了っ」と

目の前に並んでいる2機のPT・・いや1機は特機・・いやスーパーロボットと呼ばれるタイプの機体だ

「ルインシュヴァリアー・・とはよく言った物だ・・見た目のインパクトが半端じゃないな・・」

ルインシュヴァリアーはヴィータ君の機体だから、ヴィータ君のリクエスト通りに装甲を組み、武装を装備させたが・・見た目のインパクトが半端ではない・・黒塗りで重厚なデザイン・・見た目だけでも敵に威圧感を与える事が出来る・・そして・・

「お前は可哀想だな・・アイゼンヴォルフ・・」

元々ヴァルグレインの二号機として作ったのだが・・はやて君の却下を受け合体機能を排除してしまった機体だ・・それでもスペックは想定どおりの数値の筈だ、なのは君用にカスタマイズし、運動性と射撃に大幅に特化している分装甲が薄いが・・そこはなのは君なら問題なく使える筈だ・・2機の調整を終え、少し離れた所にある1機の特機を見る・・

「ゴルトフリーユゲル・・黄金の翼・・か・・シグナム君のネーミングセンスは良いんだな・・」

なんとなく感心しながら調整を始める、装甲は完成しているが、武装と機体システムがまだ未完成だ・・

「もう直ぐ・・・お前も戦えるようにしてやるぞ・・・」

未完成なのは合体システムの部分だ・・・上手い様に合体プロセスを起動できない・・・だが・・・

「資料はある・・・不可能ではない・・・」

パソコンには2機のスーパーロボットの機体データが映し出されていた・・・SRXとバンプレイオス・・・と言う機体らしいが・・・これを考えた人の発想は非常に興味深い・・・ヴァルグレインはR-1という機体にアルトアイゼンにゲシュペンストの武装を追加したPTだ・・・つまりヴァルグレインは頭部と胴体の一部に変形し、

「腕部と胴体に脚部の一部に変形する、ゴルトフリーゲル・・・そしてまだ未完成の・・・三号機は脚部に変形する・・・はやく三号機的设计をはやて君に決めてもらわないとな・・・」

三号機は、はやて君のイメージが来るまではフレームのままに放置されている・・・だがアイデアさえ来れば直ぐに装甲を組みつける事が出来る・・・それまで私がすることは

「プロセスを考えておかないとな・・・」

私はそう呟き、ヴァルグレインとゴルトフリーゲルの合体シュミレーションを繰り返し見ていた・・・

第6話に続く・・・

第5話（後書き）

次回はキラーホエールとハガネ戦の予定です、龍也達の参戦がない分少し楽だと思っています！！それと三号機と合体後の機体にフェイトの機体のアイデアを募集中です！！必ず採用とは言えませんが、気軽に参加ください！！それでは失礼致します

第6話

第6話

龍也がリュウセイ達と打ち明けている頃、ハガネの艦橋では

「針路このまま、強速前進、よーそろ！」

俺が艦橋から指示を出していると

「そろそろ、八丈島が見える頃だな」

ダイテツ艦長が八丈島が見える頃だなと言うので

「ええ。本艦は間もなく伊豆基地の防衛ライン乙を越え、八丈島海域に入ります」

海域図を見ながら言うと

「敵の動きは？」

ダイテツ艦長がリオに敵の動きはどうか？と尋ねると

「本艦周辺100キロメートルの範囲内に敵機の反応はありません」

リオの報告に俺は首を傾げながら

「妙ですね・・・間髪入れず、九州からの追撃部隊が来るものだと思いますが・・・」

追撃が無い事に疑問を感じていると

「大尉、ここでハガネの潜水艦機能のテストを行うとしよう」

潜水艦機能のテストをしようというダイテツ艦長に

「海中に潜るのですか？」

言われた事を復唱していると

「そうだ・・伊豆・小笠原海溝を伝って、南鳥島海域方面を目指す・
・海溝内では深度3000を保て」

的確な指示を出すダイテツ艦長に

「なるほど・・攻撃型潜水艦の限界深度は2000程度・・しかし、
外宇宙航行用の特殊船殻を持つスペースノア級はそれ以下の潜行が
可能です」

他の攻撃型潜水艦と違い、スペースノア級であるハガネはそれ以上の
潜行が可能だと言うと

「深海調査艇でもない限り、海溝内を潜行するハガネに近づけない
ってワケですね」

エイタの言葉に頷きながら

「ああ、そうだ・・喫水線上の全区、水密閉鎖確認・・全艦、潜水
艦行動を取れ」

ハガネはゆっくりと海中に潜って行った・

ハガネが海中を進んでいる頃のブリーフィングルームでは

（・・・結局、ハガネが発進してからクスハに会ってねえ・・・あいつをハガネから降ろすのはもう無理みたいだし・・・俺、どうすりゃいいんだ・・・？）

「どうした？何か悩み事か？」

本を読んでいた龍也が悩み事か？と尋ねて来るので

「ん・・・いやなんでもねえよ・・・」

何でもないと言事返している

「何？この艦は水中中に潜ってるって？」

ジャーダは首を傾げながら言う

「あんだ、艦内放送聞いてなかったの？」

ガーネットが艦内放送を聞いてなかったの？というガーネットにジャーダは・・・

「いや、さすがは万能戦闘母艦・・・潜行も出来るなんて大したモンだ。なあ、リュウセイ」

俺に話を振ってくるがクスハの事を考えていて返事を出来ずに居ると

「ん?・・・どうしたんだ、リュウセイ・・・元気がねえな」

ジャーダが元気が無いな?と言うので誤魔化す為に

「何でもない」

なんでもないと返事をする、ジャーダが俺の隣に座り

「それが何でもねえって面かよ・・・どれ、悩み事なら・・・この俺様が相談に乗ってやる」

笑いながら言うジャーダに

「恋の悩みならジャーダにするだけ無駄よ・・・今時、映画でも出てこないような口説き文句なんかを教えられるからねえ、そういうことなら龍也に聞いたほうが良いと思うわよ?」

「うるせえな!」

ジャーダが顔を赤くしながら言い龍也は

「私もそんな事を相談されては困りますね・・・そういう話題には疎い者で・・・」

からからと笑いながら言う龍也にガーネットは

「えっ?嘘でしょ?それだけ格好良いんだから彼女くらい居るでし

よう？」

確かに龍也は格好良いだろう・腰元まで伸ばされた銀髪に神秘的な蒼銀に輝く瞳・・こうやって座ってるだけでも絵になると考えていると

「じゃあ、アヤ大尉・・これがコバヤシ博士から預かったお薬です」
クスハがアヤに薬を手渡し

「あ、リュウセイ君・・」

クスハが話しかけてくるが・・俺は何を言えば良いか判らず

「お、俺・・格納庫に行かなくちゃ・・」

俺は逃げるように格納庫に向かった・・

ハガネ艦橋では

「本艦は間もなく北緯30度を越えます・・現在深度、3000」

進行具合を俺が報告していると

「敵の反応は？」

ダイテツ艦長が敵の反応はあるか？と尋ねる

「依然、ソーナーに感はありません」

この深度まで潜れる攻撃型の潜水艦は無い筈なのに・・・慎重だなと思っながら

「さしものDC戦闘原潜も、この深度までは到達出来ないようですね」

俺達がそんな事を話していると警報が鳴り響き

「ソーナーに感あり・・・こ、これは魚雷です!!」

魚雷だと言うリオに

「な、何!?! こんな深海に魚雷だと!」

俺が驚いているリオが報告を上げる

「雷跡6、方位2－8－7!」

その報告を聞いていた、ダイテツ艦長が

「総員・・・第1種戦闘配置! 機関、第1戦速、雷撃準備!」

戦闘配備の指示を出す、俺はその指示に従い

「了解! 機関、第1戦速、雷撃準備!」

機関部に戦闘指示を出していると

「回避運動を取りつつ、AT魚雷、1番から4番まで発射準備！」

魚雷の準備の指示を出す、ダイテツ艦長に頷き

「了解！面舵45度！1番から4番発射管に注水！！ベントオープン、ブロー！」

魚雷の発射準備をさせると同時に

「AT魚雷1番から4番、発射！」

ダイテツ艦長の発射指示に従い

「1番から4番、発射！」

ドーンッ！！

命中した衝撃がここまで来る・・・全部撃墜したか・・・と俺が考えていると

「！命中5、交差1！来ます！！！」

！！全部破壊できなかったかった！！ダイテツ艦長が即座に

「急速転舵！！！」

回避の指示をだすが・・・エイタが悲鳴にも似た声で

「間に合いません！！！」

その声と共にハガネが大きく揺れた・・・

「被害状況を報告しろ！」

ハガネの被害状況をエイタに尋ねると

「魚雷は右舷後部に命中！特斯拉・ドライブに異常発生！」

艦の動力である、特斯拉・ドライブに異常が発生するというエイタの報告を聞いていると

「後部第8、第11ブロックに浸水！」

リオが浸水の報告をする、それと同時にハガネが再度大きく揺れる

「テ、特斯拉・ドライブの出力異常により、艦が沈降します！」

艦が沈降するというエイタに

「予備ツリムタンクを使用して、深度を保て！」

予備ツリムタンクを使えと指示を出す、それと同時にリオが

「ソーナーに感あり！ 艦前方に何かがあります！！！」

今まで反応の無かったのソーナーに反応があると言われ、慌ててモニターを見ると・・・蒼い鯨型の潜水艦が映し出されていた

「データ照合終了！DCの戦闘原潜です！」

やはりDCの戦艦か！！俺が驚いていると

「どうやら、ワシらは待ち伏せされていたようだな」

ダイテツ艦長の言葉を聞きながら

（くっ・・・！まさか、奴らの潜水艦がこの深度まで潜れるとは・・・それに、こんな深海ではPTを出撃させられない・・・ここで本艦に何かあれば、海溝へ沈んで圧壊か・・・！）

「総員へ！これより、この深海域を強行突破する！」

ダイテツ艦長が強行突破すると言う

「艦長、敵艦を撃滅するのではないのですか！？」

敵艦を撃破しないのか？と尋ねるとダイテツ艦長は諭すように

「大尉・・・ワシらの最終目的地は遙か彼方のアイドネウス島だ・・・補給手段が確保されていない現状で、戦闘は極力避けねばならん」

正論だ・・・俺は頷きながら海図を画面に映し

「わかりました・・・では、本艦をこの位置まで移動させればよろしいですね？」

脱出できるポイントを指定すると

「うむ、第二戦速、前進！」

ダイテツ艦長の指示に従いハガネがゆつくりと進み始めた・・敵艦の攻撃Eーフィールドで防ぎながら進んでいると

「テスラ・ドライブにさらなる異常発生！出力が調整出来ません！
！」

出力が調整できないと悲鳴にも似た声で言うエイタが

「こ、このままでは艦が強制沈降します！ツリムタンクでは深度が調整出来ません！！」

深度を維持が出来ないと言うエイタにどうしようかと俺が迷っていると

「補機ロケットエンジンクラスター点火！急速浮上！艦の深度を保て！」

指示を機関部に使っていると

「何てこった、こいつはヤバイよ・・テスラ・ドライブの異常で重力制御が上手くいっていない！そのおかげで、艦が自然沈降どころか、強制的に海溝深部へ沈んでる！！」

エイタの言葉にリオが

「本当なの！？」

慌てながら尋ねるとエイタは艦の状態を見ながら

「ああ・・今は補助エンジンとツリムタンクで何とか深度を保って

るけど・・・グズグズしてたら、海溝の底へ沈んで圧壊する!」

その言葉に内心動揺しながら

「エイタ、本艦が現在の深度を保てる限界時間は!？」

どれほど深度を保てる!と尋ねると

「あと4分です!」

後4分でハガネが圧壊するだ・・・

「よし・・・それまでに加速必要水域を確保し、オーバーブーストを使って浮上する!」

ダイテツ艦長がオーバーブーストを使うという

「オーバーブーストを!?! あれは大気圏離脱時や非常時に使うものですが!」

こんな所で使うのか? と思いながら尋ねると

「大尉、今がその非常時だ! いいか、何としても限界時間までに本艦をこのポイントまでたどり着かせろ!」

「了解!」

俺は敬礼でその指示に答えた・・・

「前方の敵艦はこちらを待ちぶせしているのか・・・?」

敵艦の攻撃を弾きながら進むが、前方に居る3艦の動きが無い事に待ち伏せしているのか?と呟くと

「・・本艦をだ捕するつもりかも知れん。油断をするな!」

貴重なスペース級のハガネをだ捕するつもりかもしれないという

ドンッ！！ドンッ！！

進ませまいと次々と放たれる魚雷が次々とバリアに命中し四散する・
だがバリアも無限ではない、幾つか被弾し損傷していく

「連装衝擊砲準備・・撃てっ！！！！」

ハガネのメイン武装である衝撃砲で適度にダメージを与え進んで行く・・・そして・・・

「目標点に到達！ 加速必要水域を確保しました！」

被弾しながらも目的地に到達する・・・それと同時に

「よし・・オーバーブーストを使って浮上せよ！」

ゴオオツ！！！！

凄まじい音を立てながらハガネが上昇していった・・こうしてハガネは最大のピンチを1つ乗り越えたのだった・・その頃ミッドでは・・

「良いかね？出来るだけ龍也の近くの転移させるが・・・もしかすると転移位置がずれるかもしれん・・・その場合は急いで龍也と合流するんだ・・・あの世界は現在戦争中だから、識別信号の無いアイゼンは敵機と勘違いされるかもしれないからな」

繰り返し言うスカリエッティさんの言葉に頷き

「判ってますよ、龍也さんと合流すれば良いんでしょう？」

コックピットの前で言う

「まあ・・・君の事だ・・・言われなくても龍也と合流するだろうがな・・・」

苦笑しているスカリエッティさんに

「その言い方は失礼ですよ」

ちよつとむくれながら言う

「ははは・・・なにちよつとした冗談だよ、なのは君・・・それじゃあ気をつけて行って来たまえ」

からからと笑うスカリエッティさんに頷き、アイゼンヴォルグに乗り込み転移していった・・・

OG世界に2人目の異邦人が向かった瞬間だった・・・

第6話（後書き）

どうも〜混沌の魔法使いです〜OGも次で第7話です！！どうでしょう？この小説は面白いでしょうか？少し自信が無いので感想が貰えると非常に励みになります！！次回の16年目の復讐でなのはが参戦いたします！！2人目の異邦人の参戦でOG世界がどうなっていくのかお楽しみに！！それでは失礼致します

第7話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！久しぶりにナイトオブガーディアンを更新です！今回は16年目の復讐です・・そしてなのはが参戦する話です！それなりには面白いと思うのでどうか宜しくお願いします

第7話

第7話

「どうした？リュウセイ・元気が無いな？」

私がそう尋ねるとリュウセイは

「いやよ・ちょっとライの事で知らなかった事があってよ・良く考えたら俺あいつの事何にも知らないと思ってよ」

そういうリュウセイに

「知らないのは当たり前だ・お前とライは別の人間だろう？・最初から全てを分かり合えるわけが無い・時間を掛けてゆっくりと本当の仲間になれば良いさ」

私がそう言うときリュウセイは

「・・・そうだな・龍也の言うとおりだな・うん・・・・そうするよ」

頷くリュウセイを見ていると背後からリオが近付いて来て、リュウセイと何かの話をする・少し聞こえてくる会話の内容から、どうやらハガネにはリュウセイの幼馴染が乗っているようだ・私が2人の話を聞いていると、後ろからゴスロリ服を着た少女が走って来てリュウセイにぶつかる

「！」

驚く少女の顔を見て・・

（ラトウー二？・・どうしてこんな服を着てるんだ？）

私が困惑していると

「あ・・ご、ごめんよ・・大丈夫かい？」

謝るリュウセイにラトウー二は驚いた表情をし

「・・！」

何も言わず走り去るラトウー二を見ながら、リュウセイが

「お、おい・・リオ・・今の女の子、誰だ？」

どうやら気付いてない様子のリュウセイにリオも

「さ、さあ・・見かけない顔だし、軍艦には全然似つかわしくない
格好をしてたけど・・」

どうやらリオも気付いてないようで私は

「判らないのか・・さっきのは・・」

私がさっきのはラトウー二だと言おうとした瞬間、ハガネに警報が
鳴り響いた・・

「くっ！ここまで敵機の接近を許すとは・・・！索敵手は何をしていた！？」

俺がそう尋ねるとエイタは

「そ、それが・・・敵は新型のジャミング装置を使用し・・・この南鳥島付近に潜伏していたと思われます！」

その報告を聞いているとダイテツ艦長が

「テツヤ大尉、迎撃機を発進させろ！」

その指示と同時にハガネから4機のPTが飛び出す、青色のゲシュペンストにヒュッケバイン009、リュウセイの新しい機体ビルドラプターに、龍也が駆るヴァルグレインだ

「4機だけだ！？他のPTや戦闘機はどうした！？」

4機しか出撃せず、他の機体はどうしたと尋ねるとモニターにロブが映り

「すまない、大尉！他の機体は発進までもう少し時間がかかる！」

時間が掛かると言うロブに

「あと、どれぐらいだ！？」

そう尋ねるとロブはコンソールを高速で叩きながら

「6分・・・いや、4分で何とかする!」

その指示を聞いていたダイテツ艦長が

「やむをえん、それまで、本艦とPT4機で敵機を迎撃せよ!」

俺はその指示を聞きながら、4機のPTと空を舞うシューベルトを見た

「了解!」

俺はビルドラプターの操縦桿を握りながら返事を返した、隣はイルム中尉のヒュッケバイン・・・俺の隣はラトゥー二のゲシュペンスト・・・俺の上空には龍也のヴァルグレイン・・・これだけの面子なら4機でも大丈夫だと思っていると

「やれやれ・・・ヒュッケバインに関わるとロクなことが起きないよな・・・それじゃ、他の連中が出てくるまで俺達だけで頑張ろうぜ、ラトゥー二ちゃん」

イルム中尉がラトゥー二にそう言うと

「・・・了解・・・」

モニターに先程のゴスロリを来た少女が写る・・・

「!?!」

イルム中尉が驚いているのが判る・・・かという俺も驚いていたが・・・

「・・・お嬢さん、前にどこかで会ったっけ？」

イルム中尉がそう尋ねると

「・・・いつも会ってるけど・・・」

その言葉に俺は確信した・・・俺達がそんなやり取りをしてると・・・上空で滞空していたヴァルグレインから

「イルム、リュウセイ、その子はラトウー二だ・・・それよりいい加減手伝ってくれ」

頭部のバルカンと右腕のビームソードでシューベルトと戦闘しながら言う龍也に

「す・・・すまねえ！・・・今手伝う！！」

Gリボルバーを構えながら言う・・・その隣でゲシュペンストがM950ミリサブマシンガンを構えながら

「・・・いま・・・援護する・・・」

ラトウー二がそう言うのと龍也は

「頼む、私が翼を打ち抜く・・・止めは任せる・・・」

そう言って頭部のバルカンを乱射するヴァルグレインの斜め下から

ヒュツケバインが姿を見せ

「んじゃ・・・俺は狙撃で仕留めてやるぜ！龍也！」

ブーステッドライフルを構えながら言うイルム中尉に

「間違えて私を打つなよ・・・？」

そう言われたイルム中尉は

「そんなヘマはしねえよ！」

俺はそのやり取りを聞きながら・・・

（何か龍也って凄いな・・・本当ならピンチの筈なのに・・・大丈夫って気になる・・・）

味方は4機のみ・・・敵は今の所15機だがリオンが出て来てない・・・恐らく様子を見ているのだろう・・・かなりのピンチの筈なのに・・・俺の心はとても安定していた・・・

「ふう・・・力を抜いてリラックスだ・・・良し！行くぜ！！」

俺は腰元のコールドメタルナイフを抜き、駆け出した・・・

「おりゃあ！！」

旋回しながらミサイルを撃って来るシューベルト・・・俺はミサイルを回避しそのままコールドメタルナイフを突き刺し爆散させる・・・俺は着地させながら、隣を見る、ヴァルグレインや中尉のヒュツケ

バインが的確にシューベルトを打ち落とす・俺がその光景を見て
いると

ドーン・

後ろから爆発音がする、驚いて振り返るとラトウー二が

「・・・戦闘中に余所見は良くない・・・」

言葉少なく警告してくれるラトウー二に

「す・・・すまねえ・・・」

俺は謝りながら戦闘に集中した・数は多いが所詮戦闘機・PT
には勝てない・瞬間間に戦闘機は全て見えなくなった・俺達が
警戒してるとハガネから

「新たな敵部隊を感知!・・・30秒後に接触します!」

エイタに言葉に龍也が

「敵の増援か・・・リュウセイ・・・今のうちに下がれ」

俺は突出し過ぎていた・だから龍也の指示に従って下がると同時
に俺達の目の前に敵の増援が現れた・

「この時を・・・連邦軍との戦いの場へ赴ける時をどれほど待ち望ん

だことか・・・あれから、もう16年・・・レイラ、アンナ・・・お前達の無念を俺のこの手で晴らしてやる」

俺はガ－リオンの操縦桿を操作し、敵PTの方に進撃した・・・

「む・・・？」

近付いて見て判った・・・

「あのPTは・・・もしや、月で暴走事故を起こしたヒュッケバインの同型機か？それに・・・アンノウンも・・・やはり奴らの味方だったか・・・」

緑色のPTはヒュッケバインだ・・・そしてその上空に居るのは・・・正体不明のPTの筈だったが・・・ハガネと一緒に居る所を見ると・・・どうやら連邦軍のようだ・・・だがそんな事は関係ない・・・

「連邦軍に与する者には死を・・・！我が妻と娘に対する最初の手向けとなるのは・・・お前だ！」

俺は身近に居たゲシュペンストに向かって突撃した・・・

「！・・・来る！」

そのゲシュペンストは軽やかな動きで俺の攻撃を回避した・・・それと同時に

「その機体の動き、データで見た記憶があるわ・・・」

その声には俺は動揺した・・・何故なら・・・

「何だと!? あの機体・・・子供が乗っているのか!?!」

声からして・・・まだ幼い子供・・・その事が俺を動揺させた・・・

「・・・あなたはエルザム少佐と同じ、元特戦教導隊のメンバー・・・」
そう呟くパイロットの声が俺のガリオンの中に響く・・・

(・・・アンナが生きていれば、あの子と同じ年頃か・・・俺は・・・あのパイロットを撃てるのか?)

死んだ娘と同じ歳であろう、少女の声は俺を動揺させたが・・・それは本の一瞬の事だった・・・

「慈悲の心は・・・とうに捨てた」

ガリオンのアサルトブレードを抜き放ち

「俺は連邦軍の人間を一人でも多く血祭りに上げるために・・・16年目の復讐を果たすために、鬼となる!」

俺がそう言って再び突撃を仕掛ける・・・まずは・・・あのゲシュペンストだ・・・あれを落として・・・俺は真正銘の鬼となる!

テスラドライブを全開にし、俺は最高のスピードでゲシュペンストに肉薄した

「!?!」

そこまでスピードが出ると思ってなかったのか、ゲシュペンストの動きが一瞬鈍る・俺はそのままの勢いでアサルトブレードを振り下ろそうとしたが・

「させん!!」

蒼いPTが割り込み俺の突撃を防ごうとするが・

「邪魔を・するなあっ!!」

渾身の力でPTを横殴りに切り払う

「むっ・ぐっ・」

蒼いPTが片膝を付いて着地する・左肩からは火花が散っていた・

「ここは・貴様からだ!!」

あの高性能のPTをこのままハガネに置いて置くのは危険だと思い・
・止めの一撃を放とうとする・ヒュッケバインが近寄ってくるのが見えたが・おそい・このまま・コックピットを貫いてやる・

ビービーッ!!

コックピットにロックオンされた事を示す、アラートが鳴る、俺は直感的にガリオンを上空に逃した・その直後

バウッ!!

俺が居た所にビーム砲が突き刺さり、砂埃を上げる・俺はそのビームが飛んで来たほうを見て

「な・何だあれは!？」

青い機体が巨大なビームライフルを俺に照準しながら滞空していた・その機体は手に持ったビームライフルを乱射し、俺を蒼いPTから引き離す・青い機体はビームライフルを俺に向けながら・蒼いPTの前に立ち塞がった・それは護っているように見えた・

「ちっ!・増援が居たのか・だが・俺はこの程度では退かん!！」

俺の背後からリオン達が姿を見せる・俺はアサルトブレードからレールガンに持ち直し

「行くぞ!!ハガネ!!!」

俺はリオン達を引き連れて、ハガネに突撃して行った・

第8話に続く

第7話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！久しぶりのOGなので上手く書けるか不安なので、感想を貰えると嬉しいです！！今回は前後編なのはが少しだけ登場しました！！後半はハガネメンバーとなのはの出会いですが・・・どうなるでしょうか？・・・それを楽しみにして貰えると嬉しいです！！それでは失礼致します

第8話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回の話はなのはの本格参戦の話です、原作では魔王と恐れられたなのはの能力を100%発揮する、アイゼンヴォルフの活躍を見てくれると嬉しいです！！それでは今回も宜しくお願いします

第8話

第8話

私はアイゼンヴォルフの操縦桿を握りながら目の前の機体・・ガリオンを見て

「今・・龍也さんを殺そうとした・・許せない・・」

もう少し私が来るのが遅れてたら龍也さんは死んでいたかもしれない・・そう思うと・・激しい憎悪が胸の中に芽生えるを感じた・・私は

「・・私の武器じゃ・・殺せないけど・・恐怖は与えられる・・龍也さんを殺そうとした奴・・全部私が堕とす！！」

私はそう呟くとアイゼンヴォルフの両腰に装着されたショートランチャーを取り出し、空を飛び交うガリオンとリオン目掛けて突撃して行った・・

「PTの発進準備が完了しました！」

俺はビルトシュバインのコックピットの中で出撃の時を待っていた・・後は艦長の声が掛ければ・・俺がそんな事を考えてると

「出撃を許可する！」

出撃許可が出る、それと同時にリオが

「了解！PT各機、発進どうぞ！」

その声と同時に俺はハガネから飛び出した・・

「何だ・・あれは？」

俺は思わず指揮を出すのが遅れた・・上空を飛び交うリオンが次々撃墜されて行く、だが撃墜してるのはハガネのPTではなく見覚えの無いPTだった・・凄まじい機動性を持つのかリオンのレールガンを回避し、反撃でリオンを容易く撃墜していくPTに驚いてると龍也から

「あのPTは敵じゃない！！だから攻撃と言うか・・その場を動かすな！！敵だと間違えられるぞ！！」

その言葉にライが

「待て、動くなとはどういう意味だ！！あれはお前の仲間じゃないのか！」

そう怒鳴るライに龍也は

「仲間だがどうやら通信をカットしてるみたいで私の通信が届かないんだ・・だから・・申し訳ないが・・動かないでくれ」

そう言う龍也の言葉にライは

「・・了解した・・だがこれが終われば詳しく説明して貰うぞ」

そう言うところの通信は途切れた・・俺はビルトシュバインの操縦桿から手を離しながら

（新しいイレギュラーか・・龍也と言い・・あのPTと言い・・不確定要素が多すぎるな・・）

俺は自分の真の任務の妨害になるかもしれない、2機のPTの事を考えながら空を舞うPTの動きを記録し始めた・・

「動かないのは味方だね・・じゃあ・・一気に決める！」

アイゼンヴォルフのコンソールを操作して背中バックパックから無数の小型の機械が飛び出す・・ブレードビットと言ってビームの刃がついた誘導式の武器だ・・私はディストラクションライフルをアイゼンヴォルフに握らせ

「行くよ・・龍也さんを殺そうとした奴は・・全部・・私の・・敵！！」

ブレードビットを動かすと同時にディストラクションライフルを乱射しながらリオン達に向かって行った

ドンッ！！ドンッ！！

私の接近を止めようとしてリオンがレールガンを打ち込んでくるが

「そんなの・・・当たらない!!」

急加速でそれを回避しブレードビットをぶつける

ズバンッ!!

ブレードビットに両断され爆発するリオンの横目に離れた所に居る
リオン4機に向かって

「落ちろ!!」

Wモードに切り替え、大出力ビームを2発撃つ

ズドンッ!!

3機がビームに貫かれ爆発する・・・ギリギリで避けたリオンにはブ
レードビットをぶつけ破壊する・・・そして最後に1機残った・・・と
言うか残したガーリオンに指先を向け

「消えて・・・目障りだから」

私がそう呟くと同時に無数のブレードビットがガーリオンの手足を
打ち抜く・・・私は胴体だけになったガーリオンに

「さよなら・・・」

そう呟きビームを放った・・・私達の機体の武装は敵機を破壊すると
強制的に脱出装置を作動させるように出来て・・・だから殺しはし
ない・・・でも恐怖を与える事は出来る・・・私は爆発し飛んでいく脱
出ポットに眼向きもせず、離れた所にあるヴァルグレインを見て

「龍也さんに漸く会える・・服はおかしい所無いよね・・うん・・大丈夫」

私はコックピットの中で自分の服装を確認してからヴァルグレインに通信を繋げた

「龍也さん・・敵の殲滅終わりましたよ?」

そう言う龍也さんは

「ああ・・見てたから判る・・一応着艦許可は取った・・私の後を追って着艦しろ」

そう言う龍也さんに頷きモニターを切り、私はヴァルグレインの後にハガネに着艦した・・

「龍也・・あれのパイロットはお前の仲間のなのか?」

そう尋ねてくるライに頷いてると格納庫の隅で

「いや、驚いたの何のって、まさか、あのラトウーニがあんな化け方をするとはな」

そう言ってガーネットに言うイルムを見ていると何故かロッサを思い出した・・どうしてだろうか?何か良く似てると思う・・私がそんな事を考えてると

「素材も良いけど・・・あたしのコーディネートもなかなかでしょ、イルム中尉？」

楽しげに言うガーネットを見てると、アイゼンヴォルフが着艦準備に入る・・・私がそれを見てるとライが

「あれのパイロットはどんな人間か楽しみだ・・・あれだけの精密射撃・・・俺がより強くなる為にきつと役立つ」

そう言うライを見ながら

（たしかになのはの射撃の腕はピカイチだか・・・きつとライには何も教えないだろうなあ・・・）

私がそんな事を考えてるとラトウー二の事を話してたイルムが

「ああ・・・眼鏡を取ったら可愛い子ちゃん・・・っていうお約束をあそこまで地で行くとはね・・・それに比べてあの機体のパイロットはきつとむさい男だろうな・・・あんだけ容赦ない狙撃が出来るんだ・・・きつとイングラム大佐みたいに決まってる」

腕を組んで言うイルム・・・私があれのパイロットは女だと言おうとした瞬間、アイゼンヴォルフのコックピットが開き・・・中から白いワンピースを着たなのはが姿を見せる、それを見てたロブが

「女の子・・・しかも・・・超美人だ・・・」

驚いたようにいうロブ・・・私から見てもなのはは美人だからその反応は当然だな・・・と1人納得していると、辺りをキョロキョロ見回し

ていたなのはが私を見つけると、嬉しいそうに微笑む・・・だが何故か私はその笑みに嫌な予感を感じた・・・私の予感は的中しなのははにつこりと微笑むとそのままコックピットから飛び降りた・・・私はそれを見て

「おおおおッ!?!」

お世辞にも運動神経が良くないなのはが私の様に着地出来る訳無い・・・私はそう判断し一気に走り出しなのはが地面に叩き付けられる前に回りこんで

ドサッ!

両腕で抱き止めた・・・何となくだが・・・お姫様だっことか言う奴になっっていた・・・私が一安心してるとなのは私の腕の中で嬉しそうに微笑み

「龍也さん! お久しぶりです!!」

万人が見惚れるような笑みのなのはをゆっくりと地面に降ろし、私は頭を抱え

「なのは・・・私が間に合ったから良いが・・・こんな無茶は2度としないように」

そう言うとなのははにつこりと微笑み

「判りました、龍也さんに心配させるのは悪いんでもう止めます」

楽しそうに言うなのはに苦笑しているとイルムが私の前に立って、な

のはの肩に手を置いて

「これは・・・これは美しい・・・「邪魔・・・龍也さんが見えない」・・・げふ・・・ドスッ！！げぼあッ！！」

説明するとナンパしようとしたイルムを合気の要領で投げ、そのまま鳩尾を踏み抜いたのだ・・・その容赦ない一撃でイルムの意識を刈り取ったのははイルムが掴んだ所をハンカチで拭きながら

「私・・・貴方みたいなナンパな人嫌いなんですよ・・・だからあんまり近付かないで下さい」

気絶してるイルムにそう宣告するなのはを見て、同じ様に声を掛けようとしていた整備クルーはくると振り返りPTの整備を始めた・・・それと同時に

「・・・」

何時もの服に着替えたラトウーニが来る、それを見たのはは

「子供だね・・・私の敵じゃないか・・・」

そう呟くのははに首を傾げるとガーネットが残念そうに

「あら、ラトウーニ・・・もう着替えやったんだ？」

そう言うガーネットにラトウーニは

「・・・あんな格好じゃ艦内を歩けない・・・」

そう呟くラトウーニを見ながら私はなのはに

「なのは、ここの責任者にお前を紹介するから来い」

そう言うとなのは何かを企んでいる様な笑みを一瞬浮かべた・・
私はその笑みに一瞬はやてやヴィータを思い出した

（何か嫌な予感が・・気のせいかな？）

私はその嫌な予感を気のせいだと思い歩き出そうとすると、なのはが

「龍也さん！」

楽しそうな声で私の腕を抱き抱える・・私は

「どうして腕を組む？」

そう尋ねるとなのは嬉しそうに微笑み

「だって・・龍也さんに会うのは久しぶりですから・・少し位良い
じゃないですか？」

そう言うなのはに何を言っても無駄だと思い私はなのはと腕を組ん
だまま艦長室に向かった・・艦長室に行くまでの間ハガネのクルー
の私を見る目が酷く鋭くて妙に居心地が悪かった・・

第9話に続く

第8話（後書き）

・スパロボの小説化って難しいんですね・見てると簡単そうなの
にいざやってみるとこれが難しい・だから書いてる人が少ない
んだと私は感じました・でもまあ・完結までは頑張って書くつもり
なのでどうか最後までお付き合いください！それでは失礼致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4913o/>

スーパーロボット大戦OG ナイトオブガーディアン

2011年10月6日23時44分発行